
ロークアットは二度笑う。

竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロークアットは二度笑う。

【Nコード】

N9874X

【作者名】

竹

【あらすじ】

ε（*谷）>入りや

てふてふと、彼を取り巻く人々のショートストーリー。

大谷さん中心にちょこ書いてます。連載とは名ばかりで短編集と化しました。愛し愛され恋い恋われ…とにかく大谷さんです。

修道やらBで始まりLで終わるのが平気な御方はご賞味あれ。追記…リクエスト随時受け付けてます。

パーマグラネットに囁いて。

大谷さんとみんなでキスネタ

髪

豊臣秀吉×大谷吉継

「髪にも香を染み込ませたのか？」（貴様の香りが離れない）

髪（思慕）

額

竹中半兵衛×大谷吉継

「少しは休んで。ね？」（君も幸せになれるんだよ）

額（祝福）

瞼

真田幸村×大谷吉継

「大谷殿は石田殿のことをよく見て居られるでござる。」（某のこととは見ないのに）

瞼（憧憬）

耳

松永久秀×大谷吉継

「卿は、自分の幸せを願うことはないのかね？」（私が叶えてあげようか）

耳（誘惑）

鼻梁

お市×大谷吉継

「蝶々さん、かわいい…」（市の、もの…ふふ）

鼻梁（愛玩）

頬

前田利家×大谷吉継

「こんなところにまつご飯が！」（貴殿と食べる飯はうまい）

頬（親愛）

頬2

まつ×大谷吉継

「あれ、ご飯粒が。」（貴方様の笑顔でまつもお腹いっぱいになる

のでございます)

頬2 (満足感)

唇

(鏡の中の) 大谷吉継×大谷吉継

「ヒ、ヒ…ぬしなぞ、誰も愛さぬ。」 (泣くなナクナ、我が慰めてやろ)

唇 (愛情)

喉

織田信長×大谷吉継

「我以外と交わす言葉が必要か？」 (いっそのまま食い千切ってしまいたい)

喉 (欲求)

首筋

伊達政宗×大谷吉継

「蝶と竜か、悪くねえ。」 (今からお前は俺のもんだ、you s e e?)

首筋 (執着)

背中

片倉小十郎×大谷吉継

「次逢ったら：いや、良い。」（今はこれが夢でないと思いたい）

背中（確認）

胸

石田三成×大谷吉継

「刑部、どこにも行くな。」（離れるな、ずっとだ。この先未来永劫、私は貴様と共に在る）

胸（所有）

腕

前田慶次×大谷吉継

「アンタが恋してる話は、あんまり聞きたくねえんだ。」（しがみついて格好悪くても、アンタが好きだと言いたかった）

腕（恋慕）

手首

長曾我部元親×大谷吉継

「海賊ってなあ欲しいもんは力尽くで手に入れらってもんよ」
ンタの過去も未来も俺が奪う）

手首（欲望）

手の甲

風魔小太郎×大谷吉継

「…」（お疲れ様です）

手の甲（敬愛）

掌

徳川家康×大谷吉継

「刑部も天下も三成も、なんて…ワシは虫が良すぎるな。」
（今だ
けその手の中で泣かせて）

掌（懇願）

指先

雑賀孫市×大谷吉継

「手まで動かなくなった訳ではあるまい？」
（この手が守り抜いて
きたものは一体いくつあるのか）

指先（賞賛）

腹

本多忠勝×大谷吉継

「グユーン。」（もう痛くはないのだろうか…。くすぐったそうに頭を撫でられた）

腹（回帰）

腰

黒田官兵衛×大谷吉継

「どうだ刑部！これで逃げられねえだろうか？」（枷の代わりに小生が捕まえてやる）

腰（束縛）

腿

毛利元就×大谷吉継

「貴様は私の蝶よ。」（このまま籠に閉じ込められたなら…）

腿（支配）

脛

猿飛佐助×大谷吉継

「仰せのままに、ってね。」（アンタのために、動いてあげる）

脛（服従）

足の甲

小早川秀秋×大谷吉継

「僕は、貴方の道具だよ。」（愛じゃないことくらい、分かっているつもり）

足の甲（奴隸）

爪先

天海×大谷吉継

「ふふ：貴方のことは、全て分かっていますよ。」（私の全て、ああ刈り取ってしまうのが惜しい）

爪先（崇拜）

置き去りピップ。

大谷さんとみんなでキスネタ（入らなかった人たち版）

額

武田信玄×大谷吉継

「むうん、ちと軽すぎではないのか？」（幸にも不幸にも押し潰されぬようにワシが抱えよう）

額（祝福）

瞼

北条氏政×大谷吉継

「ひよっひよ！睫毛がついていたのじゃ」（今ばかりは風魔も呼べぬのう）

瞼（憧憬）

耳

明智光秀×大谷吉継

「私と共に来ませんか？」（地獄の果てまでご案内しますよ）

耳（誘惑）

鼻梁

島津義弘×大谷吉継

「おまはんは、むぞらしかね」（そしてぐらしい）

鼻梁 （愛玩）

頬

鶴姫×大谷吉継

「ほらほら、もっとニコッてして下さい☆」（表情一つでも未来は変わるんです）

頬 （親愛）

頬2

いつき×大谷吉継

「おめさに、頼っても良いんだべか？」（その腕の中は安心できるだ）

頬2 （満足感）

喉

宮本武蔵×大谷吉継

「なあ、おれさまと勝負しろよ。」（勝ったらそんな時は…）

喉（欲求）

首筋

今川義元×大谷吉継

「不思議でおじゃる…」（磨の素顔を晒しても、良いと思った）

首筋（執着）

背中

最上義光×大谷吉継

「我輩は、貴殿の名を呼ぶよ。」（吉継、吉継…間違えようもないね）

背中（確認）

胸

上杉謙信×大谷吉継

「うつくしきちょう…」（たいへいのよがおとずれたら、かくごなさい）

胸（所有）

手首

大友宗麟×大谷吉継

「貴方も愛を知るべきです。」（僕の愛を受け入れて）

手首 （欲望）

手の甲

浅井長政×大谷吉継

「市が世話になっているようだ。」（この者に幸多からんことを）

手の甲 （敬愛）

掌

ねね×大谷吉継

「秀吉さまを、お願いね。」（寂しがりやで意地っ張りなのは貴方と一緒に）

掌 （懇願）

指先

かすが×大谷吉継

「謙信さまがお前のことを言って居られた。」（誰よりも幸せになるべき者と）

指先（賞賛）

置き去りピップ。(後書き)

地方武将…すまん、キャラが分からない。

最後担当のかすがちゃんでしたが、
あれは私の願いでもあります。

みなでもみくちゃんに愛してあげて下さい。

※島津どんの方言について

むぞらしかね↓可愛い
ぐらしい↓可哀想だ

間違っていたらご一報下さい。

パンプキンの憂鬱。

大谷さんとお菓子と悪戯

伊達政宗の場合

「Trick or treat?」 (菓子が無いならアンタを食らう)

真田幸村の場合

「と、とりつく…お、あ…鳥?」 (よくは分からぬが、団子を貰えたでござる)

徳川家康の場合

「トリック・アンド・トリート」 (ワシはお菓子と刑部が欲しい)

石田三成の場合

「刑部」 (菓子はいらん貴様を寄こせ)

長曾我部元親の場合

「T r i c k o r t r e a t ツ？」（あてっ、ちょ、豆は投げんじゃねえっ！）

毛利元就の場合

「∴T r i c k o r t r e a t」（餅か。悪くないな）

前田慶次の場合

「えーっと、T r i c k o r t r e a t？」（え、もう食っちゃった？∴そ、れは食べても良いってことには…）

黒田官兵衛の場合

「T r i c k o r k e yだ！どうだ刑部、小生は賢いだろう！？」（鍵がなきゃお前さんごと食っちゃまうぞ）

パンプキンの憂鬱。(後書き)

みっちゃん、せめてTrick or treatは言おう…!!

やきもちストロベリー。

三成×大谷

「いっそのこと窒息しろオオオオ!!」

耳をつんざくような怒声が聞こえ、我はまたか、と肩を竦めた。

家康との対立から、三成はやけに怒りっぽくなったと思う。

無論、前々から神経質なところがあつたのは分かっているが、

それにしたって怒るおこる…。

『いつの間に莫迦を通り越した?』

『刀狩りだ。利き腕と共に刃を差し出せ。』

『いいだろう…気の済むまで斬滅してやる!』

探せばいくらかでも出て来る。

「はあ。」

小さく吐いた溜息は三成の「家康ウ!!」にかき消されていく。

「三成、三成。」

くんつ、と三成の袖を引っ張って我に気付かせた。

「いえやS…どうした刑部。」

袖にやったのとは別の手を三成の頬に置き、

「…我を窒息させてみせ。」

そう言った。

しばらく石のように固まっていた三成が、ゆっくりと我に覆い被さる。

本当に窒息するのではないかと思う程の長い間、唇を重ね、酸素を奪い合い、舌を絡める。

苦しくなって逃げようとしても、三成の手がそれを良しとせなんだ。
飲み込めなかった唾液がつう、と糸を引く。

口を離して、浅く息を吸って、今度は触れるだけの口吸いをした。

（…家康に妬いたのか？）

（ヒヒ…さあて、我にはとんと分からぬな。）

タンジェリンは喋らない。

黒田×大谷

『君たちは本当に仲が良いね。』

銀髪をなびかせた男がそう言ったのは、いつのことだったか。

少なくとも、小生に枷が付く前だ。

『ケッ！ 刑部と仲良しこよしに見えるか？』

投げつけられた泥団子を払い落としながらそう答えた。

仲が良いなんて、どう見たって考えられないだろうに。

元服も済ませた野郎同士に、ケンカするほど、
なんて言葉は似つかわしくない。

刑部はただ小生を苛めて楽しんでやがるんだ。

『嫌いじゃないくせに』

その言葉には、なんと答えたのか。

もう思い出せなくなっていた。

「暗、憂い事か？」

鉄球に腰掛けていた小生を数珠ですっ転ばせた刑部は、ケタケタと笑っていた。

「ああそうだよ。なんでお前さんはそんなに素直じゃないのかと思
ってね！」

あの時のように土に塗れて、器官に入った砂を咳と共に吐き出した。

「素直も何も、ぬしが嫌いだからよ。」

「小生だってお前さんなんか嫌いだね。」

「トウゼンであろ、病患いを好くとすれば、ぬしはそういう性癖な
のかと疑いたくなるわ。」

「そういう考え方が嫌いだって言っているんだ。」

「どちらにせよ嫌いなのであろ？」

「あー嫌いだね！」

『嫌いだったら、わざわざ構ったりしないだろう？愛情の裏返しは無関心だよ。』

『好いているから、お互いに嫌いだなんて言い合えるんだ。』

『少し、羨ましいよ。』

半兵衛の言う事は、知性派の小生にも理解し難かった。
けれど、

「嫌いよ。」

「嫌いだ。」

そう言い合えなくなると、チクリと胸が痛んだ。

泣き虫マンゴー。

黒田×大谷

「ヒヒ、ヒッ…!!」

愉快で仕方が無いと言うように、刑部は笑う。

だが、こんな笑い方をしてる時、あいつは不機嫌だ。

障子一枚で仕切られた部屋の外と中。

城の離れ、仕事以外で訪れる者の少ない部屋。

そこで刑部は笑う。

(寂しいのか)

よく、そう思う。

刑部がああやって一人閉じ籠って笑う時、三成は必ずと言って良い程、居ない。

わざわざ居ない時を狙って笑うものだから、てっきり居なくなっ
て嬉しいのかと思いきや、

実は逆だ。

(寂しくて)

寂しくて寂しくて、そんな自分が滑稽で、笑うんだろう。

「ふ、ふ……っ、ひ…」

そうしてもっと寂しくなって、

「…暗、いつまでそこに居るつもりか。」

小生に当たり散らすんだろう？

カタ、リ

やや滑りの悪い障子を開いて、枷のはまった腕の中に刑部を閉じ込める。

「お前さん、泣き方を間違えてるよ。」

引きつり笑いが固まって、また、始まった。

けれど、刑部は小生の腕から逃げ出さない。

「ヒ、ヒ……！暗あ、我が泣いていると？どう見ても笑っておろ。」

確かに一滴の雫すら流れた様子はないし、目だって赤くもなんともない。

でもそれは、刑部が上手く泣けないから。

いや、ずっと泣き続けて涙が枯れたのか？

刑部を抱き締める腕に、少しだけ力を込めた。

このままもつと力を込めれば、こいつの細っこい体なんてポキリと
いっちまう。

ケタケタと笑っていた刑部の瞼に、

ちう

と、小さな音をたてて唇を落とした。

「……なんだ、お前さん、ちゃんと泣けるじゃないか。」

透明な雫を降らすこいつは、きっと誰よりも人なんだろう。

泣けるように、小生が居てやるから。だから、

(だから)

「ほら、笑え。」

バナナの勘違い。

毛利×大谷

ほんの興味だった。

サンデーの名残りのせいだと、言い切ってしまいたかった。

けれど、できない。

事の発端は、大谷との茶会。（という名の悪巧み）

「大谷、一つつまらぬ事を聞くぞ。」

「あい？」

「そう、愛についてよ。」

あの時の大谷のポカンとした表情すら、鮮明に記憶に残っている。

「貴様は誰ぞ懸想をする相手は居るか？」

「同胞、急になんの「答えよ」

…居る訳無かる。」

「そうか。」

訝しげに首を傾げる大谷に、更に問うた。

「大谷、愛とはなんだ？」

「ぬし、誰ぞ良い人でもで「なんだ？」

…そ奴を大切にしたい、とかそういう気持ちである。」

また台詞に被せて来おって、と毒づく大谷だったが、我は気にしていなかった。

「大切にしたいと思う事が愛か？」

「知らぬわ。愛は人それぞれの型があるらしい。」

「…では、相手を喰らいたいと思うのは、愛か？」

「同胞よ、色恋の話なら前田の風来坊にでもしやれ。我が分かるはず無かる？」

盛大に溜息をつく大谷の肩を掴んで、床に叩きつけるように覆いかぶさった。

「も、うり…?」

「これも愛の型だろう?」

白頭巾がズレて口元が露わになる。

水分が足りていないのか乾いて見えるそれに口を寄せ、チラと相手の顔を見た。

(さすがに泣きはしな——っ!?)

まさかの赤面だった。

これから来るであろう感触に備えて、眉間にシワがよる程きゅうつと目を瞑り、
手も硬く握られて居る。

「…?」

いつまでも反応のない我に、大谷はようやく目を開けた。

「悪ふざけが過ぎるわ。」

ふい、と逸らされた顔。

まじまじと見つめていれば、居心地が悪そうにもっと逸らす。

思わず、その姿が（愛い）などと思った我に頭突きを食らわせてやりたい。

ふ、と小さく笑んで、我は大谷を解放しようとした…が、体は正直だ。ピクリとも動かない上にこんなことをのたまった。

「悪ふざけ、そう思うか？」

ぴく、と小さく揺れる肩。行き場を失った様に左右に振れる瞳。何か言いたげに開く唇…

「や、やめよ。同胞、」

ぐい、と顔を近付けて、片手を下へ。

「何をだ。」

疑問符を置いてけぼりにして、腿の辺りをサラ、と撫でる。

「っ、ふ…われに、触れること、を…！」

「我慢ならないか？」

下腹部の中心をトン、と突けば「ひっ」などと小さく啼く蝶。

その首筋に舌を這わせたところで、邪魔が入った。（いや、助けか？）

「毛利さま」

刻を告げに來た捨て駒により、我は正氣を取り戻す。

「…しばし待て。」

大谷から退き、手を引いて起こしてやる。

お互いに無言で、どう声をかけたものか分からず、情けなくも我は突っ立ったままだった。

（謝罪の言葉を――）

謝らなければ、今後関係が悪くなりかねないというのも承知していた。

しかし、謝りたくなかった。

結局、何も言い出せぬまま船に乗り、安芸へ帰った。

（ときとき）

（可笑い）

（とくんとくん）

（医者と呼ばねば）

（きゅうっ）

「ええいなんだと言うのだッ!!」

心の臓が、音が、鳴り止まない。

「くそっ」

（こんなもの）

（計算し切れぬ…ッ!!）

（傍に）（もう一度触りたい）（笑って）（我だけに）（私の）
あの時の感覚が）（心の臓がもたない）（たすけ）（て）

言い訳を考えては打ち消して、くらくらと逆上せた頭の中。

なぜ問うた？

（懸想をする相手は居るか？）

居ないと聞き、安堵した。

（愛とはなんだ？）

貴様が望む愛が知りたかった。

（悪ふざけ、そう思うか？）

気付いて、欲しかった。

（莫迦か）（触れてから、我が気付くとは…）

きゅうきゅうと締め付けられるような胸の痛みが、より一層増した
気がして、我は無意識に大谷の名を呼んだ。

バナナナの勘違い。(後書き)

この二人は百合っぽいなと思います。

すれ違いメロン。

黒田×大谷、家康×三成前提の黒田×三成と家康×大谷

※誰も報われない。枷なしかんべ。豊臣時代。大谷さんはまだ歩ける。

以上が許せるお方はどうぞ、お口汚しを…

誰もいないと思って居るのだろうか。

薄暗い廊下を手を繋いで歩く家康と三成は、傍目からは幸せに見える。

ただし、傍目からなのだ。

「ヒ、ヒ…あ奴らは仲が良いなあ。」

小生の隣の恋人は、対抗でもする気か手をそっと触れさせた。

その手を握って、

「ああ、そうだな。」

と、適当に返して、小生は見慣れた銀髪を目で追った。

「お前さんも人が悪いな。」

「貴様に言えたことか？」

何も身に付けず、肌を合わせる。

銀髪を撫でれば、気持ち良さそうに目を細める、こいつは、

「どういう意味だ？三成。」

家康の恋人だ。

けれど、今の小生たちも傍目からは恋人同士に見えるだろう。

「刑部に目をやらなかった貴様に、言われたくは無いな。」

「そうだったか？」

「ふん、最低だな。」

「どっちが。」

次の言葉を待たずに口を塞いでやれば、くぐもった声が耳についた。

「…は、…あ、かんべ、え…もう一回だ。」

「綺麗な顔して、ほんっと淫乱だな。」

「家康の前じゃこうにもいけないからな。」

「同衾もまだか。」

「何も知らぬフリというのも疲れる。」

どちらからともなく口付けて、夜を過ごした。

「暗、昨夜は…どこに居た。」

ギクリとした感覚なんて、とうの昔に忘れた。

「ああ、悪いな。終わらせたい仕事があったから籠ってたんだ。」

知性派と言うだけあって、仕事と言えば疑われないことを、小生は知っている。

「そうむくれると、可愛い顔が台無しになっちまうぞ？」

わしゃわしゃと髪を撫でれば、まだ文句を言いながらもその口調は和らぐ。

ああ、よかった。今回もやり過ごせた。

内心で安堵しつつ、本当に仕事があったことを思い出して手を離れた。

その時、刑部が小さく「さよなら、よ」と言ってたなんて、知らなかった。

「三成。」

うざったいほど明るい笑顔で、私の名を呼ぶ。

「ほら、ここ寝癖が付いてるぞ。」

「直す時間が無かった。」

官兵衛と居たから、なんてもちろん言えないが。

「そ、その…そういう三成も良いな！あ、いや、可愛いと言うか新鮮と言うか…」

「抜かせ。」

「本当だ！三成は可愛い！！」

言い切る家康は、私と官兵衛の関係を知ってもそう言えるのだろうか。

照れたフリをして、後ろを向き歩き出した。

だから、見えなかった。

家康の笑顔が苦しげに歪められていたなんて。

「刑部。」

「三成か。」

廊下ですれ違った刑部は、いつも通り私に笑いかけた。

「部屋へ戻るのか？」

「ああ。」

貴様の官兵衛が待っているからな。

これと言えないが。

「刑部はどこへ行く？」

「我はちと太閤の元へな。」

「相変わらず、秀吉さまはお前をしっかり評価して下さっているのだな。」

「なに、それはぬしらも同じであろう？」

家康と私が一緒だと？

それは違うと言いたかったが、黙っておいた。

「ではな。」

「ああ。」

刑部が私の横を抜けた。

貴様なら、すぐに気付くと思っていたのだが、見込み違いか。

嘘だった。何もかも。

太閤の元へなど行かぬ。

あれは、ただのその場しのぎ、三成から離れたかった。

友だと思っていた、恋人だと思っていた。

けれど、それもマコトではなかった。

離れたくて、一人になりたくて、会いたくて、廊下を駆け抜ける。

「……!!」

「おっと」

角でぶつかってしまったのは、家康だった。

「刑部がそんなに慌てているなんて珍しいなあ！」

ぽん、と肩に置かれた手。

この手だって、三成に触れたいに違いないのに。

「家康…」

「うん？」

「なぜ、こうなってしまうのだろう。」

ポタリ、ポツ、ポツ

声は出なかった。

ただ目から溢れる水を止められないままだった。

「大切だからこそ、気づいてしまうんだな。」

「ああ。」

「だが、それでもワシは繋がりが欲しかった。」

「…」

「だから、ワシは…」

「…ん。」

「気づかないフリをするんだ。」

我は、ぬしをただの阿呆と思っていた。

違う。

ぬしは、誰よりも聡く、悲しき男だ。

自分を見ているような気になって、家康を抱き締めた。

それに合わせて、我を抱き返す家康も、泣いていた。

（我はただ）（こうやって抱き締めて欲しかった）

その日の夜に、秘め事が増えた。

互いに目隠しをして、

「家康」

「刑部」

名を呼んで、傷を舐め合う。

愛しい人の名を伏せて、愛しい人への愛の捨場に、互いを選んだ。

満たされない、カラカラの何かがヒビ割れて壊れる音がした。

すれ違いメロン。 (後書き)

あるえ、大谷さんが幸せじゃない…マイガッ!!

チェリーは小さく爪を噛む。

すれ違いメロン。の続き

秘め事は、それからずうと続いていた。

官兵衛と三成が共に居る時に、我は家康に縋り、家康も我を求める。

滑稽よな。

家康が触れたいのは、三成だと言うのに…それが触れるのは、

醜い我なのだから。

笑いもできぬ。

『刑部、っ…平気か?』

我を抱く時、必ず家康は心配をした。

無理をさせていないか

痛くはないか

何度も問う。

(けどそれも全て)

三成に宛てたものなのであろう？

だから、我は、もう終わらせてしまいたかった。

(暗) (暗) (く、ら)

ここ最近、やけに家康の機嫌が良い気がする。

だが、私は何かした覚えは何も無い。

なのにどうしてあんなに笑っているんだ？

ぼうつとしたまま歩いていたところ、見慣れた白頭巾が廊下に現れた。

「刑部か。」

「三成か、朝餉は取ったか？」

「いらん。」

いつも通りの会話をして、そのまま横を抜けようとした。

「三成。」

ぴたり

その声に合わせて足を止める。

やはり、貴様は気付いて居たのだな。

「三成…」

「なんだ。」

刑部の声は震えていた。

「三成。」

「だからなんだ？」

「…頼む。」

振り返らない。

けれど、刑部は泣いているのだろう。

刑部がそこまで執着するのは、私ともう一つしかない。

「……あ奴を、返してくれやれ……」

やはり、官兵衛か。

「刑部、一つ勘違いをしていないか？」

「…?」

「返せも何も、あいつは自分で私を選んだ。もう貴様のものではない。」

違うか？」

私は官兵衛に好意など抱いていなかった。

それは向こうも同じで、だから共に居たのだ。

「貴様なら分かるだろう？」

振り返れば、刑部は背を向けて俯いていた。

ここまでしておいて、心が痛まぬと言うのも可笑しな話だ。

むしろ、勝ち誇ったような気分さえする。

「そうよな。」

声を絞り出して、刑部は言った。

「…あ奴は、ぬしを選んだ。…すまぬ。」

その言葉を聞いて、私は歩き出す。

今、刑部が一番会いたい奴に会うために。

「聞け、官兵衛。」

「なんだ？」

「刑部に会った。」

わざわざ三成が報告するくらいだから、何かあったんだろう。

「どうかしたのか？」

「世間話だ。」

「刑部が？」

まあ、三成相手ならあり得ん話でもないが…

「その後、言われた。返して、と。」

楽しげに笑う三成と、言われた事に対して何の感情も湧き上がらない小生。

「そうか。」

「それだけか？」

冷めた奴だ、と呟きまた笑う三成の頭を撫で、抱き寄せる。

「良いのか、帰らなくて。」

「今帰っても数珠が飛んでくるだろう？」

「それもそうだ。」

抱きしめたのも、接吻をしたのも、抱いたのも、笑顔を見たのも、好きと言ったのも、名を呼ぶ事さえ…

もう思い出せないほど遠い記憶になっていた。

忘れたのは、小生に愛がなかったからか？

それとも、

脳裏を過った考えは、快楽に飲み込まれて行った。

「帰ったか。」

部屋の前には、刑部がいた。

「おう、ただいま。」

ひら、と手を上げて中へ入る。

動こうとしない刑部を招き入れて、座らせる。

「なんか用か？」

「用が無くては来てはならぬのか？」

恋仲なのに、と薄ら笑いを浮かべる刑部は、儂げかつ、妖艶さを醸し出していた。

「まあ、用もあるが。」

「仕事なら断るぞ、お前さんの寄こすのは酷いのばかりだ。」

「ヒ、ヒ……！ワザとに決まっておろ。」

いつもいつも遠くにばかり行かせやがって、と刑部を軽く睨みつければ、肩を竦めてはあ、と息を吐いた。

「……どんなに遠くにやっても、ぬしは帰って来て我に文句を言いやる。」

「当たり前だ。」

「……そういうところを、好いておった。ずうと前からな。」

すす、とこちらにやって来て小生に寄りかかり刑部。

（こんなに細かったか？）

触れたら、壊れてしまう気さえ、した。

「暗、我は、誰かを慕うという気持ちがよう分からぬ。」

「ああ。」

「だから、どうすればぬしが喜ぶのかも、我の元に帰って来るのかも、分からぬ。」

「…おい、何言って」

「そうである、ぬしは、我から離れるばかりよ…好いても、好いても、

…我を見てはくれなんだ。」

俯いて表情の見えない刑部に触れようとした。

けれどそれは、最後に残っていた良心が咎めた。

（汚い手で触るな、ってか。）

自分の心と体の動きが噛み合わない。

「すまぬ、…こんなことを言うつもりは無かった。最後に、一つ頼まれてくれぬか？」

やはり、反応するより前に体が動いて、小生は頷いていた。

「ぎゅ、って、しやれ…」

気恥ずかしそうに笑う刑部に、どうしてか涙が零れた。

「借りるだけ、よ…今だけ。」

貸すとか借りるとか返すとか、そんな言葉が聞きたかった訳じゃないのに。

小生は無言で刑部を抱きしめた。

「…あたたかい、なあ…くら。」

「ああ」

「久しぶりよな。」

「ああ」

気の利いた台詞の一つや二つ、かけられないもんかね。

小生は、こんな時ばかり臆病だ。

「…好きよ。」

「…」

「…すまぬ。」

好きと返せない、謝るべきなのに、言葉が出て来ない小生。

「暗。」

「…吉つ、ぐ…」

「ぬしは、優しいなあ…」

ああ、そうか。

小生が三成を見ていた時、お前さんも小生を見ていてくれたのか。

遠くにばかりやったのは、三成から離れたかったから、

そんで、文句を言いに小生が自分のところに来るようにしていたんだな。

今更気付いたって、もう遅いんだろう。

刑部の涙すら、拭えない。

チェリーは小さく爪を噛む。(後書き)

本当はこの後に三成と家康のターンが待っていました、あまりにも報われなくて私の心が折れました。

：希望されたら、書こうと思います。

やっぱり報われませんが、それで良いなら：

みたらしピーチ。

大谷×真田×大谷

※童話っぽい。幸村が姫。

姫は、憂鬱でした。

なぜならば、この世界では姫だから。

戦には当然出してもらえず、ただ結婚して子を成すためだけに生まれたようなものでした。

だから、目の前に悪い魔女が現れた時、姫は抵抗せずに捕まったのです。

「外の世界は、こうなっているのでござるか！」

「街一つで騒がしい姫さまよな。」

「連れ出したのは貴殿でしょう。」

「攫ってくれと言ったのはどこの誰だったか。」

魔女は、足が悪いらしく、ふわふわの空飛ぶ絨毯に乗っていました。

心のきれいな者でなければ乗せられないなんて嘘を言って、姫を乗せようとしませんでした。

けれど、姫とて頭を使います。

「こうすれば乗れるではありませんか！」

魔女の膝に乗って誇らしげにそう言うと、驚いた魔女は仕方なく

姫を膝に乗せたまま、空を飛びました。

「きれい…」

ついに国から脱出してしまった姫は、夕焼けに照らされる国を見て、そう呟きました。

さあ、姫を自分の城へ連れ帰った魔女は準備に取り掛かります。

この姫をダシに、やって来た者たちを逆に捕まえ、身の回りのことをさせようと思ったのです。

有能なものが手に入れば、姫を国へ返すはずでした。

けれど、姫が魔女の世話をしてしまうので、それは叶わなくなってしまうました。

「姫、本が読みたい。」

そう言えば姫はたくさんの書物を抱えて来てくれるのです。

「姫、少し寒い。」

そう言えば、姫は暖炉に火を入れてくれるのです。

「姫、腹が減った。」

こればかりは姫にはできず、魔女がすることになりましたが。

それでも魔女は、姫との生活を好きになりかけていました。

だから、姫がこの城から出ていけないように様々な持てなしをしました。

姫が飽きないようにドラゴンを遊び相手にし、戦わせてあげました。
それなのに、

「魔女殿、某はそろそろ誰かと手合わせがしとうございます。」

姫がそんなことを言うものだから、魔女は困ってしまいます。

仕方なく、姫の情報を掴んでやって来た暗という奴と戦わせてみました。

驚くことに姫が勝ってしまったのです。

「姫、楽しいか？」

「はい！」

嬉しそうに笑う姫を見ると、魔女は心臓の辺りが痛くなるような気がしました。

暗には国へ帰ってもらいました。

そのため、姫を取り返しにやって来た者が姫の返り討ちに遭うという事件は、

国中に知られてしまったのです。

「あの princess はどうやら魔女に操られてるんだな？」

さすらいの旅人は、そう勘違いをして魔女の城へと向かいました。

やはり同じように姫が相手をしましたが、この旅人、かなりの腕前です。

お互いに一步も引かぬ戦いが三日三晩続き、ついには姫が負けてしまいました。

「姫!!」

魔女が姫に駆け寄ります。

姫はもう、虫の息でした。

魔女は最後の力を振り絞って、姫に魔法を掛けました。

姫を救うことと引き換えに、姫を運命の人のキスでしか目が覚めなようにしたのです。

目が覚めた時、姫の時間は動きだし、目の前には運命の人が居る、

そうなければ良いと、もう魔法を使えなくなった魔女は思いました。

最初のキスは、あのさすらいの旅人でした。

二人のキスを見ていると、とてもお似合いで、魔女はもっと心臓が

痛くなりました。

けれど、姫は起きません。

旅人は帰って行きました。

それから何十年が過ぎても、姫の運命の人は現れませんでした。

魔女は焦っていました。

自分の寿命が近いことを悟っていたからです。

皺くちやの手で姫の柔らかい頬を撫で、魔女は泣きました。

あの時、自分が城から連れ去らなければ、と、後悔しました。

魔女は最後の日、姫の眠るベッドに腰を掛け、その手を取りました。

「姫。」

もう一度だけでも目を開けてくれたなら…

魔女は悲しげに笑いながら、姫の手の甲に唇を落としました。

ぴく

と、微かに姫が身じろぎしたような気がしました。

ぼやける視界の中で、姫の笑顔だけが輝いているようでした。

「…最期に、良い夢を見た。」

「某を置いて、勝手に死なないで下され、魔女殿。」

姫はそう言いながら、目を閉じる魔女に口付けました。

するとどうでしょう。

魔女は死の国から連れ戻され、みるみるうちに若返っていくではありませんか！

「これは…」

驚きのあまり声でない魔女に、姫が言いました。

「魔女殿が某に掛けた魔法のお陰で、某も少しだけ魔法を使えるよ

うになったのでござる。」

「…我は、ぬしは運命の人のキスでしか目が覚めないようにしたのに…これは一体。」

「まだお分かり頂けないのでござるか？…某の運命の人は、貴殿でござる。」

耳を疑う魔女でしたが、その手は姫と繋がったままでした。

「某と共に、生きては下さらぬか？」

魔女は胸がいっぱいになり、ただ頷きました。

「…喜んで、お受け致すわ…姫さま。」

それから二人は末永く幸せに暮らしましたとさ。

みたらしピーチ。(後書き)

ご都合主義バンザイ!!

幸せにしたかったんだが、方向性を間違えたような気がする。

グレイプの夢日記。

黒田×大谷

※現代転生とバサラ時代が入り交じり。現代によ谷さん。

こんな夢を見た。

「お前さん、誰だ？」

小生が入ると、少し窮屈な部屋に、一人の少女が居た。

「さあ、誰だって良かる。」

ふむ、それもそうか、と頷いて、はて、と首を傾げた。

「ところで、お前さん、ここはどこかね？」

痩せこけて、頬の辺りがやや窪んだ少女は、こう答えた。

「病院よ。」

病院、なんだそれは、とやはり首を傾げるが、鼻を突くツンとした匂いに、

きつと薬師がいるところだろうと思った。

「お前さんは、どこか悪いのかね？」

どうしてだか足のある寝床の上にいる少女は、こう答えた。

「足と、肌が弱いだよ。」

なるほど、だからそこから動けないのか。

布団に隠れてしまっただけはいるが、きつと足は包帯で巻かれているんだろう。

「お前さん、ずっと一人か？」

薄い桃色をした部屋で、ずっと。

首の辺りに管を通した少女は、こう答えた。

「……そうよ。」

そうか、一人か。

「なら、これから小生が見舞いに来てやろうか？」

夢だろうが、なんだろうが、これも何かの縁だろう。

ぽた、ぽた

「……もっと早うに、来やれ……ばか。」

その涙を拭おうと手を伸ばした時、少女の目が見えた。

それは、自分が最も憎み、嫌ったあの……

「……ら、……く……」

「ほえ？」

「…ば官兵衛さまは今頃お目覚めのようで。」

嫌みったらしく小生の頬やら前髪やらをぐいぐい引っ張るのは、

刑部。

「…もう、泣いてないんだな。」

ふと口を突いて出た言葉に、刑部は首を傾げる。

「いや、なんでもない。夢を見てたんだよ。」

少女は、もう余命が一年も無かった。

幼い頃から病弱で、たまの旅行に行けば事故で両親を失った。

友は、時々やってくる喘息持ちの三成と言う男だけだった。

少女は、前世の記憶を、断片的にだが、覚えていた。

（暗、暗…）

昔の自分は、きっとその（暗）が嫌いだったのだろう、とずっと思っていた。

薄桃色の部屋に移され、とうとう死を覚悟しなければいけなくなつた。

何一つ良い事がないまま、たった一人で。

そんな時、

こんな夢を見た。

ノックもなしに病室へ入ってきた男は、

「お前さん、誰だ？」

声、その形、手にはめた枷。

男は、自分の覚えている中の、暗、だった。

他愛もない疑問と返答のやりとりが繰り返されていく。

（暗、暗）

一つ質問が重なることに、自分は記憶を取り戻すのに、相手は、我が誰かと言う事すら、気付いていなかった。

「お前さん、ずっと一人か？」

一人になったのは、ぬしが居ないせいよ。

そう、言ってしまったかった。

「なら、これから小生が見舞いに来てやろうか？」

現世では、顔も見せぬくせに。

そんなに優しい言葉を掛けるな、やめやれ…

もっと我に時間があったなら、もっと我が健康であったなら、

「……もっと早うに、来やれ……ばか。」

目が覚めた時、眼瞼は腫れぼったくなっていて、ツン、と鼻の奥が

痛んだ。

「痛てててッ！！ちょ、おい、もっと優しくできんのかね！？」

廊下の奥で、ぎゃあぎゃあど騒ぐ声と、それを咎めるような看護師の声が聞こえた。

「もうっ、そんなに元気なら入院なんて要らないんじゃないですか？黒田さん。」

「痛い痛い！折れた骨があ！！！」

現れたのは、両手を折って、まるで枷のように包帯を巻かれた、暗だった。

（どちらにせよ、遅すぎるわ、暗め。）

グレイプの夢日記。(後書き)

この後、両手の使えない暗へあーんとか、キノちゃんの闘病生活とか、色々ドラマがあるはずですよ。

誰か代わりに書いてくれませんかね…？

おこたの中のペア。

大谷×鶴姫

※会話文です。

「大谷さん！今年も！大量の！みかんをつ！」

「落ち着け巫女殿…」

「これが落ち着いていられますか！寒いですが、寄ってください。」

「わざわざここに入る必要はあったか？」

「大有りです。寒いのは手足だけじゃないんですからね？」

「私のコタツが…ぐふえ、巫女殿、腹を押すな腹を。」

「もうっ、どうしてこう言う時黙ってぎゅっとしてくれないんですか！」

「今ぎゅっとしたら我は何か出そうな気がしやる。」

「きゃああ！あっち行って下さい！！」

「押すなと言ったであろ。」

「いたっ！だからってどうして叩くんですか！？」

「悪いことをした子を撫でろと言うのか。」

「ええ、そうです！さあ！」

「…はあ。」

「髪をぐしゃぐしゃにしないで下さいっ！」

「撫でて欲しかったのであろ？」

「もっとこう、優しくです！」

「我には難しい相談よなあ。」

「えっ？あれだけ眠っている私を撫で回すくせに何を言ってるんです？」

「……なぜ起きていると言わなんだ。」

「そうしたら撫でてくれないに決まってるからです★」

「というか、撫で回す程でも無いと思うが。」

「…知っていますよ大谷さん、私の腹を撫でつつ『発展途上よな。』と呟いたことを！」

「はて、なんのことかさっぱり。」

「胸と腹の違いが出てないってことですか！そりゃ孫市姉さまのよ

うにはなつてませんけど!」

「み、巫女殿、落ち着け。」

「大谷さんが大きくしてくれないからってことですよね?」

「なぜそこで我の名が出やる。」

「だって胸って揉めb「やめよ巫女殿。」

「えへへ、あったかいです。」

「全く…甘えたいなら最初から言いやれ。」

「最初から言ってたのに甘えさせるのを恥ずかしくてたのはどっちですか?」

「…困った巫女殿だ。」

「困った大谷さんです。」

おこたの中のペア。 (後書き)

大谷さんと鶴ちゃん。

結構好きです。

ほわほわした空気を出してくれれば良いなあ…

ラ・フランスの動物愛護。

黒田十大谷

※大谷さんが猫、かんべが犬。

「ご主人、飯はまだかね。」

「我がひっくり返してやったわ。」

「なんてこった。」

「ご主人、構ってくれんかね。」

「主様は今忙しい。」

「そいつは残念。」

「代わりに我が可愛がってやろ。」

「お前さん、爪を構えて何をする気か。」

「ご主人、散歩に行こう。」

「主様は今居らぬ。」

「くう……。」

「我と行くか。」

「ご主人とが良いんだ。」

「ご主人、遊んでくれんかね。」

「主様は今パソコンに夢中よ。」

「あの絡繰を壊してしまおうか。」

「主様に嫌われるぞ。」

「ご主人、遊んでくれ。」

「聞き分けのない犬め。」

「この尻尾で誘惑してやろう。」

「主様はパソコンの中のオジさんに誘惑されておるが。」

「なぜじゃー。」

「…。」

「なぜじゃー。」

「何を騒いでおる。」

「遠吠えだよ。仲間が気付いてくれるんだ。」

「気付くとどうなる。」

「来てくれる。」

「嘘を吐け。」

「元々、主様は猫派で、我のご主人よ。ぬしのご主人は主様の、と様である。」

「小生のご主人はご主人だよ。」

「なにゆえ。」

「犬嫌いなご主人だけど、小生を嫌っちゃいないから。」

「ぬしだけ特別扱いか。」

「お前さんもだろ。」

「…主様は動物アレルギーだったな。」

「ほらな。」

「お前さんは小さいな。」

「猫だからよ。」

「ご主人は小さいのが好きなのか？」

「ちっぱいも好きだと言っておった。」

「わふ。」

「丸くなって我の真似か。」

「ご主人に好かれるなら、それでも構わんさ。」

「暗め。」

「また小生の飯をひっくり返しただろう。」

「はて何のことか。」

「流石に怒ったぞ。」

「ひひひ。」

「∴。」

「もっと何か言うてみせ。」

「∴。」

「あ奴め、黙ったまま散歩に行きおった。」

「…。」

「暗を怒らせてしまったようよ。」

「…ちとやり過ぎてしまったかもしれぬ。」

「…。」

「…一匹で喋るのは、寂しい。」

「…。」

「のあん。」

「のあんのあん。」

「泣きながら鳴いてどうしたんだ。」

「ぬしが教えたのであろ、遠吠えよ。」

「仲間は来たか？」

「主様が帰って来てくれた。」

「そこは嘘でも小生が来てくれたと言うべきだろう。」

「死んでも嫌よ。」

「なぜじゃ。」

「ご主人は今日も絡繰とにらめっこか。」

「我は先ほどもふもふされた。」

「ずるいぞ。」

「ひひひ。」

「ご主人、早く小生に気付いてくれ。」

「へぶしゅっ! ずび…ご飯だ、おいで。」

「わふ!」

「のあん。」

(またひっくり返す気だな)

(しかしこれではひっくり返せぬ)

(なるほど、皿と皿がくっついているな)

(落ち着いて食らいやれ、私の皿にドッグフードが入ってしまう)

(ふごふごふご)

ラ・フランスの動物愛護。(後書き)

家では猫飼ってます。

元ネタは2chの何かのコピペだった気がします。記憶力の無さで思い出せません。orz

鳴き声ですが、にゃあ、って鳴く猫が身近に居ません。

のあん、とか、のわん、と鳴いてるのがいるので、参考にしました。

血染めのアプル。

三成×大谷

千人斬りと称し、ここ最近、城下町の者が斬り殺されるという事件が相次いでいた。

とある町奉行が、そのことを太閤に知らせに来たらしい。

「病は千人を斬り、その血をねぶれば完治するとして、誰か病人の仕業ではないかという噂が…」

「それが吉継だと申すのか。」

「へえ、なんせ噂なものでして…」

ペコペコと頭を下げる町奉行と、静かながらも激怒する太閤。

怖や怖や…

我関せず、何もせねば、疑いも晴れよう？

床に戻ると告げ、早々に寝てしまう。

目が覚めたのは、丑三つ時。

体の上に、何か、否、誰かが覆いかぶさった。

「よく寝ているな。」

私の頬を撫で、薄く笑うのは、我が友、三成。

まどろむ意識の中、ひんやりとしたものが口に触れた。

そこに神経を集中させれば、三成が何かを塗っているらしかった。

（薬、か？）

不治の病に効く薬などあるまいと、と、薬にはあまり頼らなかったが、

それを知る三成だからこそ、こうして我が寝ている間にこっそりと塗って――

（！……これ、は…まさか、）

塗りたくられていたモノから漂う香りは、戦場に居る時に感じるそれと同じ。

「まだ、百にも達していない…もう少し待ってくれ、刑部。」

我は、動けない。

これは、薬だと思っていたこれは、

（血、か。）

薄い唇に紅を指すように塗られた、人夫の、血。

「刑部、刑部…」

逃がすまい、として抱き込まれ、口を重ねられる。

ぬる、としたものが入り込み、口内までもが、香りで包まれる。

（死臭…）

愛おしそうに頬を撫でる男の手から、体から、匂う。

くらくらと、熱い舌に脳みそまでもが溶かされてゆく。

「ぎょうぶ。」

幼子が母を呼ぶのとは違う、そう、欲しいものを求める雄の声が、頭上で響いた。

（三成、三成…）

重い瞼を押し上げれば、銀の月が、狂気の色を含んで、我を見下ろしていた。

（ああ、われは…ぬしを拒めない）

血染めのアプル。(後書き)

この後、千人斬りはぱったりと止みます。

だって血なんてねぶった(舐めた)ところで治りませんもの。

パーシモンと雨と無知。

佐吉×大谷

佐吉は知っていました。

蝶が今まさに羽化しようとしていることを。

だから、手伝おうとただけなのです。

薄く柔らかい透明な羽を引っ張ると、

それはピリリと音を立てて佐吉の両手に残りました。

ポトリと地面に落ちた蝶。

どうして飛ばないのだろう、と佐吉は思いました。

せっかく、殻を取ってあげたのに。

佐吉は知らないのです。

それは殻ではなくて羽だということを。

「しょうがない、わたしがめんどろをみてやろう！」

ぴくりぴくり

返事をするように、蝶が、いいえ、

芋虫に戻ってしまったようなものが動きました。

「おまえのなは、ぎょうぶ。」

蝶は今も、籠の中で飼われているのです。

パーシモンと雨と無知。 (後書き)

何が言いたいかと言うと子どもの無邪気って時々こあいつてことですよ、たぶん。

書いたのが深夜でしたんで、何書きたかったのか自分でもサッパリです。

あ、リクエスト受け付けてます！

なんてことないフリユイの末路。

私＋大谷

※作者が出ています。

季節のフルーツシリーズを書き終えて、一旦手を止めて大谷さんと対話した。

「ぬしはなぜ、こんな夢物語を書く？」

「：きつと私が幸せになりたいんでしょうよ。」

「我が皆に愛されると、ぬしは幸せになるのか。」

「はい。大谷さんは幸せになりませんでしたか？」

「慣れぬ事ばかりで戸惑いの方が大きいわ。」

「そりゃ失礼しました。：ふは、きつと、ここで書いた事も私の希望でしょうね。」

「ぬしが書いているのだから、当然であろ。」

「そうですね。だから、正直、こうしてお話したくはないんです。」

私は私の願望を喋らせることしかできません。」

「なら何も申すなと？」

「まさか。存分に喋って下さいよ。」

「ぬしが書かねば、我は言葉を発せぬ。」

「そうでしたね、何を喋りたいんですか？」

「ぬしの思うがままを。」

「…意地悪ですね、流石です。脳内でボイス再生余裕でした。」

「戯れ言はもう良かる。」

「はい…では、感謝を。」

「…ここまで読むとは、なかなか我慢強き者よな。ヒヒ、気が向けばまた来やれ、

りくえすとは随時受け付けておるそうよ。」

「ありがとうございます。」

「竹。」

「なんです？」

「我らはぬしが書くようにしかならぬ。」

「ええ、そうですね。」

「…結果的に、ぬしが我を幸せにしてくれるのよな。」

「……………」

「画面の向こうにも、幸を降らせるか？」

「…らしくないですよ、大谷さん。」

「…。」

「不幸を降らせなくて良いんですか？」

「…。」

「どうして喋ってくれないんですか、私の想像でしょう？」

「…。」

「…そんなこと言わせたら、もう引けないんですよ？」

「…。」

大谷さんは、画面の中で不適な笑みを浮かべるばかりだった。

「…幸せにして下さい、って意味ですよ、さっきの。」

「殺し文句でしたよ。」

「何か言っして下さいな。」

「大谷さん。」

彼自身の言葉が欲しいと、最近よく思います。

こんにちは、そっちはどうですか。

こっちはなんとかやっています。

液晶の壁を超えられない私は、今日も彼に言葉を喋らせて、自分を幸せにします。

なんてことないフリユイの末路。(後書き)

1～12月までのフルーツ書き終えたどー！

フルーツの解説は活動報告でします。

少しは楽しんでいただけたでしょうか？

私は至って大丈夫です、危なくないです。

そしてリクエストを下さいm(_____)m

何が言いたいのかやっぱり分かりませんが、

今後も大谷さんを見守って欲しいです。

ばきばきカカオの日。

大谷さんとみんなでポッキーゲーム

伊達政宗×大谷吉継

「Are you ready？」

「6本も持ってどれを食えと…」

真田幸村×大谷吉継

「iiiiiii参る！！」

「参るも何もチョコがぬしの体温で溶けておるわ。」

石田三成×大谷吉継

「刑部とポッキーゲーム…」

「やれ三成、これは苳ポッキーだったか？何やら赤い。」

徳川家康×大谷吉継

「ずるいぞ刑部、自分から折ってしまうなんて。」

「…せねば我が食われてしまうであろ。」

前田慶次×大谷吉継

「今キスしたら、きっとチョコの味だろうな、してみ「ない。」…残念。」

長曾我部元親

「いただきます。」

「壁に押し付けるでないわ!」

毛利元就

「…3本では、なかなか折れないはずよ。」

「待ちやれ、ぬしまで阿呆にッ…む、ぐ…」

ぱきぱきカカオの日。(後書き)

落ちを毛利さまにお願いしてみました。

私は彼らをなんだと思っているのだろう。

あ、クロカン忘れた。

忘れんぼシュガー！

お市十大谷

お花畑に行きましょう？

そう言ったのは、いつだったかしら。

蝶々さんのだから、お花は好きなはずでしょう？

驚いた顔が、とても可愛らしかったわ。

下らぬな。

そう、言われてしまったのだけれど…やっぱり、蝶々さんは優しいのね。

「綺麗ね。」

「さようか。」

「蝶々さんは、そう思わない？」

千日紅、三波丁子、寒菊、山茶花…きれい、きれい。

いけないわ、市ったら、一人ではしゃいで。

慌てて蝶々さんの元へ戻るの。怒らないで、ごめんなさい、もう勝手なことはしないから。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

「第五天、何を謝っておるのか、我にはとんと分からぬな。」

「…怒ってないの？」

「何を怒れと。」

「市が、どこかへ行ってしまうこと、蝶々さんは怒らないの？」

＊＊さまは、怒ったわ。

それが誰だったのかは、よく分からないけれど、きっと市が悪い子だからね。

「…また、戻って来るのであろ、ならば良し。」

蝶々さんはそう言って、竜胆を市に差し出すの。

「…市に？」

「ぬしと我以外、ここに誰が居ると言うのやら。」

「そうね、ふふ…そうね。」

市もお花をあげたかったけれど、ちょうど降ってきた葉っぱが目にとまったから、

それを蝶々さんの髪に飾るの。

きれい、きれい。

「銀杏、か。」

「榎もきつと似合うわ。」

闇色さんには内緒。だって怒られてしまうもの…

「蝶々さん。」

「うん？」

「…市、お花は好きよ。」

大好きなお花が、一つあった気がするの。でも、思い出せないの。

「ああ。立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花…ぬし自身も花のようよ。」

「蝶々さんは、お花、好き？」

「さあて…どうであろうなあ。」

蝶々さん、蝶々さん、お花（市）を嫌いにならないでね。ずっと、ここに居るわ。

「…帰るとしやるか。」

「はい、蝶々さん。」

蝶々さんは足が悪いから、輿に乗っているの。それを市が追いかける。

ちゃんと市の歩く速さに合わせてくれるのよ？蝶々さんは、優しいから。

「第五天。」

「なあに、蝶々さん。」

「…いや、なに……ぬしの歩く姿が、ほんに百合のようであったと思うただけよ。」

「ふふ。」

蝶々さんは口が上手いのね。

一瞬だけ、ほんの一瞬、蝶々さんの声が震えたのは、秋の風に吹かれて、寒かったからかしら…？

帰ったら、一緒にコタツに入りましょう？

ね、蝶々さん。

忘れんぼシュガー。(後書き)

忘れられるのは、悲しいですね。

長政さまは現在市ちゃんの記憶にありません。

そして花言葉の紹介です。

竜胆^{リンドウ}..悲しむあなたを慰めたい、あなたの悲しみに寄りそう、正義、
悲しんでいるときのあなたが好き、淋しい愛情

銀杏^{イチョウ}..長寿

闇属性はどうしてこんなに悲しくなるんでしょうか。

南部さん!ご閲覧のお客様の中に南部さん及びイタコ、降霊術を
習得している方はいらっしゃいませんか?

閲覧、ありがとうございました。

ソルトに悲劇。

明智×大谷

※現代転生によ谷さん。学バサ設定。
ソルトに悲劇。

困った。非常に。

現在我は、とても化粧の濃い女子らに取り囲まれている。

「調子に乗ってんじゃねえよ！」

体育館の裏なんて典型的で古典的な場所に呼び出され、

どうせだから思い切り笑ってやろうと出向いたが…失敗した。

どうせまた、三成か権現辺りのファンである。

だいたい、調子になぞ乗っておらぬわ。

こちらら前世よりの付き合いよ、今更男女の中になる訳無かる。

そう言ってやりたいが、前世なんて説明のしようもない。

小さく溜息を吐こうものなら、普段は整った顔立ちが鬼の形相に歪

む。

そして、体育館の壁に押し付けられるようにして、詰め寄られる。数は7人と言ったところか。

「石田くんに付きまとうのをやめろって言ってんのよ！」

「…。」

こういう時、わざわざ否定するともっとややこしくなる事を、我は知っている。

女子らには見えないよう、手を壁と背の間にやり、メールを打った。こ奴らには悪いが、目当てが三成であるならば、今から幻滅されてしまえ。

送信ボタンを押し、やれやれと一息吐いたところで、腕を掴まれ、持ち上げられる。

「あ。」

「何セコイことしてんだよ!?!」

「早く移動しよっ!」

うかつ。

先程のメールには、体育館裏としか入力していない。

気を抜きすぎたか、これは…髪の毛を全て雫られるくらいは覚悟せねばな。

クスクスという笑い声が頭上で響く中、埃くさい倉庫の床に、

我はまるで芋虫のように転がっていた。

腕は後ろで縛られ、口にはガムテープ。

前ほどではないが、やや動くのに不自由する足だけはなんとか縛られずに済んでいる。

「どうする？ やっちゃう？」

ケタケタと笑ながら私の髪を掴み、ぐい、と引っ張り上げる女子。

ああ、我に罵詈雑言を吐く口で三成に愛だの恋だのを囁こうと言うのか。

恐ろしいことよ。

髪を掴んで引っ張り上げられ、そちらを見ればフラッシュをたかれた。

「!？」

「あー目え瞑ってんじゃん。」

眩む視界に、女子の一人の携帯電話が入ってくる。

まさか

「キヤハハハ!! ほらあつ、脱げ！」

制服に手が掛かり、ぶちぶちと布が敗れる音がした。

…またしても、うかつ。

甘かった。最近の女子は、こうやって人を追い詰めていくのか。

上着のボタンは恐らくほぼ全て引き千切られ、Yシャツも無残な姿になった。

僅かにしかその存在を主張しない薄い胸と、それを覆う下着の白が

目に痛い。

「うっわ、貧相な体。」

「てか、マジ色黒くね？キモくね？」

「ええ〜！？石田くんてば貧乳が好きなの！？」

やいのやいのと、勝手な事を…

「あ、ねえ！男呼んじやおよよ。」

戦慄。

私の思考回路は一時停止する。

…今、なんと？

分かっているはずなのに、その答えを出すことを脳が拒む。

ヒヒ、我とて所詮は、女子ということか。ああ、こんなにも体が震える、ふるえる…

ついにはスカートにまで手が伸び、

ここだけまるで記者会見でも行われているかのような光の雨が、降

り注ぐ。

がらっ

突如、倉庫の扉が開かれた。

カツカツと倉庫内に響き渡る足音。

逆光に煌く銀髪。

そして、

「…随分と、楽しい事をしているじゃありませんか。」

笑顔を讃えながらも、地の底を這うような声。

「あけ、ち…?」

取れなかったガムテープの中で、声が行き場をなくしてくぐもる。

「大谷さん、先生を付けなさいと言っているでしょう?」

お世話にも爽やかとは言えない笑顔で、こちらに歩み寄っては白衣をふわりと我に掛ける。

「さて：君たち、何をしていたんです？」

にっこり

効果音をつけるなら、それ。

だが、当の女子らは半ば放心状態であんぐりと口を開けている。

我とて同じ気分よ。なぜ明智が：

しどろもどろになる女子らを眺め、明智は再び口を開いた。

「1組、××さん、×？さん。2組、――」

どうやらそれは、ここに居る女子全員の名前らしく、呼ばれた生徒は顔面蒼白、

もはやどちらが悪人だか分からぬわ。

「…覚悟して、下さいね。」

白衣に身を包んだ我を横抱きにし、そう言って

倉庫から出る明智の面は、悪人そのものであったように思う。

処変わって、保健室、通称…明智の住処。

「いやあ、それにしても良い格好ですねえ？」

舐め回すような視線を寄越すので、急いで白衣に腕を通す。

ぽす、という気の抜けた音と共にベッドに降ろされ、ようやく一息吐いた。

「見ても面白いものでは無かろ、ジャージを持って来ては…くれぬよな。」

「良いじゃありませんか、白衣似合ってますよ。」

ベッドの端に腰を掛け、明智は尚もニヤニヤと薄気味悪い笑顔を浮かべる。

その顔に数珠でもぶち込んでやりたいが、助けられた事に変わりはない。

だが…

「…なぜ、ぬしが来た。」

「貴女がメールしたからですよ、当然でしょう？」

我は三成にメールしたと思っていたが。

送信履歴を見れば、確かに送り先は明智になっていた。

明智

浅井

石田

…なるほど、並ぶ順序を見れば間違えるのも無理はない。

「ふふふ…まあ、石田くんには、そんな姿見せられないでしょう？」

「確かに、な。」

借りを作ってしまったということだけが、思考を支配する。

「お弁当。」

「うん？」

「手作り弁当で手を打ちましょう。」

目の前のこ奴は…何を言っている？

突然過ぎて頭が追いつかない。

今日は厄日か、そうか。

「明日、楽しみにしていますよ。」

先程見せた凍り付くような笑みでも、薄ら笑いでもなく、

余裕を持った、笑顔。

残念なイケメンとはぬしのことよな、きつと。そうして笑っていれば、まだ見れる。

…いやいや、そうでなく。

弁当？なにゆえ。

「それで貸し借り無しにしてあげます。」

再び笑った明智は、やはり悪人面だった。

ざわざわ

心臓の辺りが、そう騒ぐのは、気のせいであると思いたい。

気付けば頷いていたけれど、

（全然、格好良くなぞないわ。）

ソルトに悲劇。
(後書き)

続く…かも？

草食系ビネガー。

三成↓↑大谷

※学バサ設定。

「刑部。」

どこか遠くから、我を呼ぶ声が聞こえた。

「刑部。」

ああ、また。

「起きろ、いつまで寝ているつもりだ。」

枕にしていた腕を引っ張りあげられ顔をあげる。

呆れ顔の三成が見下ろしていた。

「…あいすまぬ。うとうとしていた。」

「そうか。帰るぞ。」

腕を離され、机の横に掛けて置いた鞆を手取る。

しとしと

外は雨が降っていた。

ツイていない。今日に限って天気予報を見忘れるなんて。

「傘を忘れたのか。」

「ああ、先に帰りやれ。我は雨が止んでから帰ろう。」

「それだと遅くなる。そこの駅まで歩いて今日は電車で帰るぞ。」

特に考えるでもなく、頷いて座布団から降りる。

それを鞆に詰めて、三成の傘に入った。

しとしと

駅に向かうにつれて、雨足は強くなったように思えた。

（残らなくて正解であったか。）

「刑部、水溜りだ。」

「あい。」

支えられ、更にそんな言葉を掛けられる。

：雨の日くらい頼るのは、仕方のないことよ。

そう自分に言い聞かせて水溜りを避けた。

ぶるるる

車一台がようやく通れる道を、バスが通った。

泥水を跳ねさせながら。

道路側に居た三成に、それが少し掛かる。

我はポケットからハンカチを取り出して制服を拭いてやった。

ぶるるる

今度は、車だった。

急いでいるのか、水飛沫を上げながら向かってくる。

逃げ場は、電柱の影。

民家の壁と、三成に挟まれる。

私の視界は三成で覆われた。

傘に入った時よりも距離が近くて、手を伸ばせば触れられる程。

そして、二人分の白い息が、空気に溶けて見えなくなった。

しとしと

車は去った。

それに合わせて、三成も退く。

傘に入り直してまた歩き出す。

距離は、もしかしたら少し遠くなったかもしれない。

同じ傘に入っておきながら、なぜそう思うのか、気付いてはいけな
いような気がした。

近くて遠い。

そうこうしているうちに、駅に着いた。

「空いているな。」

「そのようよ。」

電車の中に人はまばらにしか居らず、その誰もが椅子に座って居た。

ぽっぽっ

雨が窓を叩く音が不規則に鳴った。

とん

肩に何かが乗って来て、横を向けば三成が我に凭れて眠っていた。驚きのあまり、声が出ない。

（三成が、寝ている…？）

まともに食う寝る休むをしない、この男が、寝ている。

すうすうと寝息が頬に掛かり、くすぐったい。

ふわりと、三成の香りが鼻を掠めると同時に、先程引っ込んだはずの睡魔が我を襲う。

（ならぬ、今我まで寝ては――）

意識は、どろりとした沼に引きずり込まれて行った。

ぴ、ちょん

首筋に冷たい物が落ちて来て、もぞりと体を動かした。

焦点の定まらない目で前を見やれば、銀色が揺れている。

「…。」

そこは、もう電車の中ではなく、いつもの帰り道だった。

恐らく我より先に起きたのだろう。

起こせば良いのに、三成は我を負ぶって歩いている。

（降ろしやれ）

その一言が出てこないのは、寝起きで声が上手く出せないせい。

（ありがとう）

礼の一つも言えないのは、言い慣れていないせい。

言い訳を並べて、また目を閉じた。

心音が速まっていることに、我も三成も気付いている。

我が起きてること、知っているのである。

それなのに、どちらも何も言わぬのは、

（何のせいにすれば良いのか）

ソイに蜘蛛の糸。

長曾我部×大谷

ここ最近、寝不足でよくうとうとしていると思う。

なぜか。

原因は分かっているのに、それをどうにかする術を知らない。

頬に当てられた手、撫でられた頭、掴んだ腕：

夢にそれらが出て来るせいで、安眠もできない。

ぼんやりと、また目を閉じる。

「大谷。」

「…ん…」

呟かれるのは、甘く柔らかい響き。

「大谷…」

ぬしのせいで、眠れない。

曖昧な声色。嫌われては居ないと思う。

しかし、本当に特別好かれているかと聞かれれば、そうだと即答もできない。

「ほら、起きろ。」

手を伸ばされる。

そう、このせいで、先一步が踏み出せない。

絶対に自分から触れようとはしない。

手を、伸ばすだけ：

こちらから求めなければ、それ以上を望まないとも言いたげに、

紳士ぶって、素知らぬ顔をして、引きずり込もうとする。

まるで、蜘蛛が巣を張って獲物を待ち構えるよう。

触れれば千切れてしまうような糸の中に、どうしたって千切れない糸を忍ばせて、

がんじがらめにされていく。

それが分かっていたとしても、蝶はまだ逃げられずに、その腕に手を伸ばすしかないのだ。

くろすわードミソ。

慶次↓大谷↑伊達

※学バサ設定。

明智が出張でいない保健室。

それだけでそこは地獄から天国へと姿を変えた。

サボりに来る生徒が後を立たないため、見張りとして一人の生徒に白羽の矢が立った。

大谷吉継

その外見もさることながら、口から吐くのは恐ろしい病名と来れば、生徒たちはまず近寄れない。

誰だって自分の余命など聞きたくもないし、やけに説得力があるせいか、

そんな気がしてしまうのだ。

ただの暗示。

だが、それを信じ込ませる術に掛けてはザビーにも劣らないだろう。

そんな彼のいる保健室に、今日も来客がある。

「ヒ、ヒ…これはまた、派手にやったものよ。」

人の怪我を見てニヤニヤと嬉しそうな顔をするコイツ。

本当に根性ねじ曲がってんなって思う。

「Shut up! ちょっと打っただけだ。」

「ほう、ちよっと、か？」

頬の辺りに手をやって、少し強めに撫でられる。

いや、撫でるなんて優しいもんじゃなくて、抓るって方が正しい。

「いっ…——つてえええ!!」

「…にしても、サッカーボールを顔に受けるとはなあ。」

笑ながら目を細めて、まだ俺の顔をペタペタ触りやがる。

「痛ッ！！…サッカー部があんなところで活動してるからな。」

そう、俺は幸村の蹴ったボールを顔面でキャッチした。

それを聞けば、またコイツは「ヒ、ヒ」と楽しげに笑う。

（人に降りかかる不幸がそんなに嬉しいか、人として終わってんだろ）

そう思うのに、だ。

その笑顔を可愛いとか思ってる俺の方が終わってる。

今だって、顔に手が触れてて、もっと触って欲しいだとか、俺も触りたいだとか…

そんな事ばかり考えてる。

顔が赤いのは、サッカーボールが当たった、それだけのせいじゃない。

「男前が台無しよなあ。」

「っ…！」

息を、飲む。

分かってる。（ただの世辞だ）

それなのに、熱が、心音の速度が、上がる。

「今はイケメンと言うのであったか？」

「…らしいな。ま、キャーキャー騒がれんのは好きじゃねえ。」

「贅沢者め。」

「アンタは、そう言うの無えのか。」

「…と、言うと？」

「女と付き合ったりだとか。」

キョトンと間の抜けた顔をして、すぐに肩を震わせ俯く。

そして、いつもの引きつり笑い。

「ヒ、ヒ…！ぬし、頭まで打ったか？ひゃひっ！…く、笑わせ、ふ、

ふ…！」

「笑い過ぎだろ…」

腹を押さえてバンバンと俺の肩を叩く。いてーんだよ、オイ。

「この容姿なのでなあ、言い寄ってくる女子など居らぬわ。」

「そう言うもんか？」

じゃあその容姿ごと好きになった俺はどうしてくれんだ。

「あー…じゃ、もし付き合うならどんな女が良いんだよ？」

「もしも話か…ふむ。」

特に考えた様子もない。が、こっちにはかなり重要な話だ。

ま、男同士だとかそういうのは後で考えりゃ良いだろ、うん。

「…我を、好いてくれる者が良い。」

「は？」

「我に好きだと言ってしまえる奇特な者が良いと言ったのよ。」

そんなの、今すぐにだって俺が――

「なら、俺が」

ガタリと椅子から立ち上がり、大谷の両肩を掴んだ。

その奥でふわりと動いたカーテンと、人の影。

「ま、えだ…」

「よっ！独眼竜。」

「ようやく起きたか。」

三者三様にそれぞれに言葉を掛けて、俺は気まづくなって大谷の肩から手を離れた。

「…何か言い掛けていたか？」

「お、俺が探してやる！」

「は？」

「俺がお前の事好きな奴探してやるってんだよ!!」

ああもう、めっちゃくちゃだ。

普段人の恋を応援しまくってるくせに、どうしてこういう時だけ邪魔すんだ、前田の野郎オ…

訳わかんねえ事言って、部活に戻ると伝えて足早に保健室を出る。

「だぁー!! Shitッ!!」

前途多難。

大谷のこと好きな奴なんて、いっそ、

(お前の目の前に居るぜ、とか)

いつか絶対言ってる。

「…妙な奴よ。」

「ははっ! アイツも熱血だからなあ、意外と本気で探してくれるか

もしれないぞ。」

吉継の後ろに立って、肩に顎と両腕を乗せてダラリと脱力する。

「重い。」

悪いな、独眼竜。

お前の恋、今だけは応援してやれねえんだ。

きつとコイツは、本当に好きって言うてくれる奴を好きになるだろうから、

俺は狡いから、

ごめんな。

「好きだ。」

くろすわードミソ。(後書き)

強かK Gは好きですか。

出番は抑えまくっています、だってK Gだもの↑

その割に、出しやばってる感があるのは気のせいでしょうか。

閲覧ありがとうございました。

使いかけシーズニング置き場。

私+大谷

※作者が出ています。

季節の果物のお次は調味料の「さしすせそ」

ミソの使い処が可笑しいのは目を瞑って頂こう、そう思って手を止める。

「…二度目まして、大谷さん。」

「ヒヒ…もう気付かれたか。」

いつの間にか携帯の画面に映り込んでいた影に、盛大に頬の筋肉を緩ませる。

「…今日も其処ですか。」

「ああ。我は画面からは出て来られぬようよ…ぬしの前ではな。」

「…私の？他の人の前には出ていると！？」

そんなファンタジーな世界、聞いてない。何が、私の何が駄目だと言うんだ。

あれか、襲いそうだからか。

「…普通、こういう処では、ぬしが此方へ来るものではないのか？」

「確かに、其方へお邪魔したいですが…私がそちらへ入ったところで、

物語りは展開しないんですよ、大谷さん。」

モブとしての役割ならこなせるかもしれないが、

メインとして動けるかと問われれば、否、としか言いようがない。

二次元に入りたいのは山々だ。しかし、入れるとすれば、それはやはり私でないと思うのであって。

「…ぬし」

「止めて下さい、夢見ていたいんです。」

「……こちらへ来られないというのは」

「大谷さん。」

臆病者は、自分の想像にすら、負けてしまうのです。

都合の良いように解釈しようとしても、限度があるのです。

妄想だって、自分を出してしまうと壊れてしまうのです。

「大谷さん、やっぱり私、外からの方が楽しいです。」

「さようか。」

貴方の目には、私を入れたくないのです。

汚い、穢れ、邪な心を見透かされそうで、怖いのです。

「ヒ、ヒ…」

「何が可笑しいんです？」

「自分の創り出した者に、そんな事を思うぬしはどうかしている。」

知らないフリをして下さいよ、意地悪ですね。

「百も承知よ。」

また来てくれますか。

「ぬしが望めば、な。」

待ってますね。

「たまには茶くらい出してもバチは当てぬぞ？」

大谷さんに当てられるなら本望です。

「よし、数珠を当ててやろ。」

「こちらに来られもしないくせに。」

ポツリと出てしまった本音。

当てられるなら、いっそ当ててみやがれってんです。

大谷さんは、それ以上何も喋りません。私の想像が途切れたせいでしょう。

「我を見くびるなよ…?」

ツンと鼻を刺すような香りが漂ったのは、気のせいでしょうか。

使いかけシーズニング置き場。(後書き)

ええ、気のせいでしょうね↑

私は至って普通の人です、怪しくありません。

通報とか警察とかお巡りさんとかワンさんとか止めて下さいお願いします。

そしてリクエスト受け付けてます！

ミルキィから招待状。

黒田×大谷

※現代転生（記憶無し）によた谷さん。

「いい加減にしやれ。」

助手席に乗るコイツは非常に不愉快そうにそう言った。

黒い短髪に褐色肌、服で見えないが所々に巻かれた包帯。

一見すればおめかしのつもりだろうか、

白とクリームを基調とした生地には赤い蝶の刺繍がされた、ふんわりと柔らかそうなカーディガン。

その下には深緑のワンピース。こちらには、まるで蜘蛛の糸のような白い刺繍が目立つ。

首から掛けた懐中時計は胸の辺りでチクタクと時を刻んでいた。

対する自分は、特にめかし込んだ訳でも無く、

いつも通り古びたジーンパンにカーキ色のジャケット、インナーはそれに合わせて黄色がかったている。

加えて無精髭と長く垂れ下がった前髪、こう言ってしまうばなんだが、

とても釣り合っているとは思えない。

「すまんね、こういう事は初めてなんだ。」

「…なんと？」

キョトンとした表情を浮かべるソイツに、どうしたって逆らえそうにない。

相手は中学生だと言うのに、とっくに成人済みの小生が気圧されている。

「女を車に乗せた事がないって言ってるんだ。」

それを聞けば、もう顔を覗かなくなっただうなっているか分かる。

唇を噛み締めてぷるぷると震え、笑いを堪えているんだろう？

ああ、思った通り、コイツは身をよじって笑い出した。

だが、それもすぐに止まってしまう。…マズイ、な。これは。

笑い飛ばしてくれたのなら、まだ良かったのだが、コイツは怒るべ

き点に気付いてしまった。

「…で、予定は未定と言う訳か？」

返す言葉もない。普段、知性派知性派と言って回っている割に、こういう事を計画し、

更に実行した事などなかったものだから、つい俯きがちになる。

「普通、どこに行くとか考えるものではないのか？」

「あー…」

「我に決めろと言っても言うのか？」

やれやれ、と盛大に溜息を吐き、じとりとこちらを睨まれる。

なんてこった。少しくらい、考えて来たって本当は良かったんだ。

小生だって、こんなつもりじゃなかった。

煮え切らない様子の小生を見て、コイツは何か思いついたようにニイと口角を持ち上げる。

「のう。」

どこか大人びて、妖艶ささえ伺える声色に、びくりと体を震わせる。

なんて声で人を呼びやがるんだ、小娘のくせにつ…！

けれども、とっくに「なんだ」と返事はしてしまっていた。

「…こういうとき、することがあるであろ？」

身を乗り出して笑いかける。含み笑いだ。

その笑顔を見て、ごくり、と生唾を飲み込んだ。

分かっている、分かっているのだが…

それをしてしまえば、本当に取り返しが付かない事になることも、分かっていた。

気付いているくせに、素知らぬ顔をして首を傾げる。

「なんだ？」

「我に言わせる気か…？」

次のコイツの言葉だって、簡単に想像できる。

ああ、そうだよ、小生は臆病者だ。なんとも言いやがれ。

「身代金よ。」

小さな鞆の中から携帯電話を取りだして、笑顔を貼り付けたまま小生に渡す。

「まずは私の身代金を用意して貰わねばなあ？」

期待感いっぱいに囁かれた言葉。携帯には、あの石田財閥の家紋「大一大万大吉」がある。

震える指先で電話番号を押しながら、

馬鹿なことをしてしまったつい先程までの小生自身を恨んだ。

(ちくしょう!)

ミルキィから招待状。(後書き)

かんべさんリアル手錠コース行ってらっしゃい！

うえでいんぐキャメル。

家康×大谷↑三成

それは、嫁ぐ前に見た、白昼夢。

白無垢にその身を包み、角隠しで表情は読み取らせない。

それはどこからどう見ても花嫁衣装であつたが、

中身の自分は手弱女には程遠い男だつた。

なぜそんなものを着ているのかと言えば、

これから婚礼の儀が行われるから、らしい。

らしい、と言うのは自分は化粧だけして待機せよと言われたため、

それ以上のことを知り得ないからだ。

関ヶ原を回避するため、輿入れする事に落ち着き、

ならば刑部が良いと阿呆を抜かされ、今現在こうなっている。

そこへ、す、と襖が開けられ、正装をした友が姿を見せた。

「刑部、支度は済んだか。」

「もちろんよ、三成。」

軽く白粉を乗せ、まぶたから目尻にかけて薄桃色の化粧。

ただ唇の紅は真紅で、そこだけ浮いているような気がした。

どうやらそれは三成の目にも留まったらしく、眉を僅かに顰める。

「刑部、貴様ならもう少し薄い色の方が良い。」

無言で紅に指をやろうとすれば、手を掴まれ、引き寄せられる。

浮かない顔が間近に迫り、息を飲んだ。

「遅いぞ、二人とも！主役が揃わなくてハラハラしていたんだからな！」

三成の手に引かれた我を見つけた家康が不安げな声色でそう言った。

何も今更逃げも隠れもできるわけ無いと言うのに。

そして、婚礼の儀が手配通りに進められて行く。

ふと顔を上げたそこには、友の姿があり、

自分と同じ口元の紅が白い肌によく映えていた。

（これで、ちょうどよくなった）

（さらってはくれぬのよな）

（それをのぞむか）

（……………いな）

ミディアムと両極端。

本多×大谷↑お市十家康

まどろむ意識の中、ワシは緩やかに目を開いた。

夢を見ている気分だ。夢の中で布団に入っているのだから、何やら滑稽な心持ちだった。

ふわふわと水の中、あるいは空にでも浮かんでいるようで、それでいて、

落ちるという不安は一切無い。

これは、なんというのだろう。

この空間は――

「忠勝、お前最近どこに行ってるんだ？」

ワシに内緒で。

無機質な機械音は、何も答えてはくれなかったけれど、その目が揺らいだのを見逃さなかった。

「ははっ！別に怒ろうと言うんじゃない、ただ聞きたいだけなんだ。」

お前が毎晩、誰に会いに行っているのか、を。

意識したつもりはなかったが、恐らくは睨み付けるような顔をしていただろう。

重い口がようやく開いて、ワシに不幸という名の言葉を降らす。

「…大谷…の、元に。」

…さすが刑部、と言うべきか。まさか、こんな形で友を失いかけるなんて思わなかった。

どう誑かしたんだ？ワシの友を…ワシの絆を裂こうと言うのか、

それが三成との絆を断ち切った罰だとしても、言いたいのか。

無表情のまま忠勝を見つめて、目を伏せる。

「そうか…分かった。」

否定でも肯定でもない返事を返す。（そう、ただ、それを認識しただけ）

日も落ちていたが、ワシの足は自然と大阪城へ向かっていた。確かめなければ、確かめなければ…！

「ひかりいろさん。」

鈴の音のような声が、すぐ後ろから聞こえる。

その呼び方をする人は一人しか居ない。

くるりと振り返れば、静かな闇に溶け込むように、第六天魔王の妹、お市が佇んでいた。

「…光色さん。」

「お市殿！」

「ふふ…こんばん、は…」

ゆうらり、と覚束ない足取りでこちらへ向かってくる。

その姿に恐怖を感じることはなかったが、どこか邪魔されてしまったという気がした。

「…どこへ行くの…？」

「あ、ああ！散歩なんだ。どこへという訳では…」

「うそ。」

もう一度、その柔らかそうな薄桃色の唇が動く。

「うそ…」

「嘘？」

頭の中を覗かれているような、心の臓を掴まれているような、ぞわり、

と、後ろに誰かが居る訳でもないのに、無性に振り向きたくなった。

「…蝶々さんに…会いに行くの、ね…？」

「…。」

答える事は、できなかった。

「だめよ。」

「…お市殿は、何をどこまで知っているんだ？」

「…市は、何も知らないわ。」

「はは、それこそ…嘘だろう。」

ぴくりとも動かない表情で、その口元は「そうね」と続ける。

怖い

これ以上踏み込んではいけないという警報が鳴り響く。

これが魔王と血を分けた者の纏う空気なのかと思えば、妙にしつくり来てしまう。

「光色さん。」

「なんだ？」

「…蝶々さんから、もう何も取らないであげて、ね…？」

「お市殿、それは…ワシは、そんな」

「じゃないと…」

市はガマンできなくなってしまうわ。」

日の落ちきった影の世界で、それは舞うように飛びかかってきた。

—ちようちようさん— —市が—ずっと— —**さま—

—市じゃ—駄目—なの—？—

—好—きよ— —一緒に— —蝶々さん—市—も— —お側に—
— —居てあげるの—に— —

—泣かないで— — —幸— —

「あ」

それは、確かにお市の叫び声だった。か細く、すすり泣くような。

ぼんやりと部屋の中を見回す。障子の隙間から光が差し込んでいた。

あの手に襲われた後、誰かが運んでくれたのだろうか。

あの声は、恐らくお市の心の内の一部だったのだろう。

我慢、しているのだな。何も知らないフリをして、ずっと。そして、これからも。

罪悪感 嫉妬 親愛 慕情 執着 嫌悪 切望

それらが一緒くたになった、言いようのないものに押し潰されそう
な、声。こえ、が。

す、す―

廊下の方から布を引きずる音が聞こえた。

慌てて布団に潜り、寝ているふりをしてしまった。

どくどくと脈拍が部屋の外にまで聞こえているんじゃないかと思う程、耳に響く。

「…まだ寝ていたか。」

襖を開けて入って来たのは、自分が会いに行こうとした人物、刑部だった。

ワシが寝ているのを見て、安堵するような声を出す。

「ぬしの従者が昨夜慌てて飛んで来おったわ。あまり心配を掛けさすでない。」

枕元に座って、まるで小さな子供に言い聞かせるように話す。

だが、そんなことよりも、（昨日忠勝が来た）ということの方がワ

シにとっては重要だった。

この男に、どれだけ入れ込んでいるのだろう。

忠勝のことだから、きっと戦になればワシと共に戦ってくれる気がした。

けれど、もし、

「：妙な事を考えたものよ。」

また心の内を見透かされたようで、ぎゅう、と目を瞑った。

何も言えない、言いたくない。

布団の中で小さくなっているワシの頭を、骨張った手が撫でた。

「…。」

「…。」

何も言わないまま、時間が過ぎていく。

ツンと鼻の奥が痛んで、無意識に唇を噛み締めた。

何も失いたくなかった。

けれど、それは無理だと知った。

自分も奪う側に回っていたこと、

友一人救えないこと。

後から後から、言葉の代わりにそれは溢れ出す。

「…家康。」

この空間に名を付けるなら、それはきっと、不幸なんだろう。

ああ、だって

（こんなにも、離れたくない）

不知なしシャープ。

伊達×大谷

あー…くそ、仕事が終わんねえ。

正直飽きた、だるい。小十郎のバーカ。ばーかかーばー！！

「独眼竜、右目の悪口を言って仕事は減るのか。」

「…いいや、減らねえ。」

「なら、口より手を動かしやれ。」

「…oh…一個聞いて良いか。」

「なんぞ。」

我が物顔で炬燵に寝そべる大谷に、今日1番、いや、今年1番の疑問を投げかける。

「なんでアンタがここに居るんだ…！！！」

「右目にな、頼まれたのよ。」

「Ah？」

話是这样だった。

俺が仕事から逃げてばかりだから説教をくれてやりたい、でも小十郎は野菜を見たい、

そんでもって野郎共に任せたら言いくるめられて一緒になって遊ぶだろう、

誰か代わりに俺の様子を見張る奴が必要だ、

だが猿じゃ俺の背中を狙いかねない、他にオカン属性は居たか、

↓大谷

「我とて、狙おうと思えばぬしの背中どころか首の一つや二つ。」

非常に面倒くさい、と言いたげにお茶に溜息を吹きかける大谷。

「Hey、それ俺のティーだろ。」

「右目が置いて行った。」

「俺のじゃねえか！」

「知らぬわ。」

ずずー…

「ああああ!!」

「やかましい、仕事はどうした、仕事は。」

ぐ、と言葉に詰まり、またしぶしぶと机に向かう。

Shitッ!!

足の悪い大谷だ、俺が興を持って逃げれば追いかけられないのは目に見えていた。

が、それを実行できるかと言われればNOだ。

第一、どうして俺が興持って走り回らなくちゃいけないんだ。

ブツブツと文句を言いながら仕事を進める。

進まない。

もう一度頑張ってみる。

進まない。

ずずー…

大谷が茶を啜る。

「だぁーっ!!」

「今度はなんぞ。」

「…休憩させてくれ。」

「…………勝手にしやれ。」

「T h a n k s .」

ごろりと畳に体を転がして天井を見上げる。

木目が俺を嘲笑っているようで、なんだかいつそ泣けて来た。

「独眼竜、これは南蛮の書物か？」

どこから持ち出して来たのやら、俺が単語練習に使った紙の束を大谷が持っていた。

「逆だ、こうやって読め。」

持ち方を教えてやったが、読めているとは思えない。

ふと暇つぶしを思いついた。

「大谷、これどういう意味分かるか？」

指さしたのは

I l o v e y o u .

と書かれた一行。

「はて。」

思った通り首を傾げる大谷を見て緩む口元を慌てて隠した。

よし、これは使える。

「これはな、あいらあびゅ、って読んで意味は私は貴方が嫌いです、だ。」

「ほう。」

物珍しそうに目を細める大谷。真剣な顔をして聞いているところ悪いが、

正直腹の底で大爆笑もんだ。

「あい、らびゅ…」

「ぶはっ」

「…なんぞ。」

「い、いや…なんでもねえ…!!」

あの大谷が真顔で I love you って…! ぷるぷると肩を震わせつつその様子を見る。

「あいら…?」

「I love you」

「あい、ら…びゅ」

「I love you」

「あいらあびゅ」

出来る限り俺も真顔でそう返す。

顔が笑ってしまいそうで、頬の筋肉がピクピク痙攣しているのが分かった。

教えた意味が「私は貴方が嫌いです。」なものだから、

もしかしたら、今後どこかでそれを誰かに叫んでくれるんじゃないかと淡い期待を胸に抱く。

「独眼竜。」

「お、おう。」

思わず声が裏返りかけた。ヤベエ…

「あいらあびゅ」

清々した、というような笑みを浮かべて、いや、超ドヤ顔で、

大谷はそう言った。

(きゅん)

いやキュンてなんだオイ。

待て待て待て！大谷的には俺の事が嫌いって言ってる訳、だから…？

「…？あいらあびゅ」

反応の無い俺に、聞いていないと勘違いしたのか、

また同じ言葉を繰り返す。

笑いがこみ上げて来て、良いはずなのに……

「…I love you」

出て来たのは、同じ言葉。

やべえ、これは、なんか…ヤバイ。

何も知らない相手に言わせているという背徳感とでも言うのだろうか、

他にも何か喋らせてみたくて堪らない。

「大谷、次はこの I want to kiss you. っ
のを」

「政宗さま。」

「「あ」」

なぜか怒られたのは俺だけだった。

2刻近くも正座をさせられて、足の感覚が既に無い。

(S h i t…)

(ぬしのお陰で一つ南蛮語を覚えた。暗辺りにでも言うてみるか)

(い、いや！あれは俺だけに言っとけ！な？)

(なにゆえ)

(良いから！！)

不知なしシャープ。
(後書き)

落ちなんて、無い。

ストロングへ片思い。

片倉×大谷

竜の右目と呼ばれる片倉小十郎が、いつも通り畑にやって来る。

愛おしげに畑を眺め、そしてウネの中に入っていった。

あれを見ると、舌を打たずにはいられない。

それどころか、いつそあの畑をメチャクチャにしてやりたいとさえ思う。

もちろん（しないが）

否、できない。

そんな子供じみた真似が出来る程、単純には行かないものだった。

抱くはずの無い思い。

それに気付いたのも、やはりあの憎き畑のせいだ。

奥州へ来てから、することもないから畑仕事くらい手伝ってやろ、と声を掛け、

畑を耕す作業を数珠にさせ、その上から我は種を蒔いた。

だが、いくら触れてないとは言え、土埃は被る。

しかし、

『大谷、砂ついてんぞ。』

そう言っ、なんでもないように右目は我の片頬に触れた。

あの目を、一度だが我にも向けた。

愛おしげに、大切なものを扱うように。

ずくり、と、体の中心がどこかへ持って行かれたようで、酷く混乱した。

（これは、なんぞ）

それを考える度に、それに侵蝕されていくようで、我は考えることを止めた。

…つもりでいた。

考えたくなくとも、勝手に浮かんで来てしまうのだから、これはもう重症だ。

片倉を見て、なぜそんなにも息がしづらくなるのか、不思議でもある。

ったが、

それと同時に、知ってはいけないような気がした。

けれど、己はそれに気付いてしまった。

右目が野菜に微笑めば、我の目も薄く細められ、

右目が溜息を吐けば、どうしたのかと心配になる。

勝手に右目の行動に一喜一憂してしまうようになっていた。

（由々しき事態よ、早になんとかせねば）

そうは思っても、どうにかする術など知らなかった。

相手は男だと諦めようとした。

そんな時、決まって右目はやって来るのだ。

『大谷、顔色が悪いぞ、今日はもう休め。』

優しい顔をして、また、あの目を我に向ける。

そうして、結局踏ん切りのつかぬまま、今日に至った。

今までだったら、愛おしそうに野菜を見つめるその横顔に、私も喜んだものだ。

けれど今は、それを知ってしまった今は、野菜にすら餅を焼く。

（真正面から、右目の笑顔を拝めるのであろう？）

我は一度しか、見た事がないのに。

（右目に優しく話しかけて貰えるのであろう？）

言うておくが、独眼竜の話しか聞いておらぬぞ我は。

（簡単に触れて貰えるのであろう）

……葱になりたい。

当の右目とは言えば、ただただ愛娘でも見るような温かい目で、採った野菜の土を払っていた。

（こちらを見よ、右目）

そう思っても、見るはずなど無い事は、分かっていた。

相手の眼中に入っていないことも。

けれど、ああ、思いたくなかった。

（葱に負けた…っ）

なんて。

（葱に…ひひ、我は葱以下か、そうか…）

（大谷の奴、もっと一杯食わねえとなあ、骨ばっかだと抱き心地が悪……今俺は何を…）

考えているのは互いの事なのに、それは伝わりそうにない。

ストロングへ片思い。(後書き)

あれです、大谷さんは大谷↓片倉↓野菜
だと思ってます。実際は大谷↓↑片倉
です、多分。…葱になりたい。

寝ぼすけカフェに愛の手を。

私＋大谷＋A L L

※作者が出ています。

目が覚めたら、どこかで聞いた事のあるような声が響いていた。

「L e t ' s p a r t y ! Y a — h a — ! !」

やはり、どこかで聞いた事がある。

「天、覇、絶槍!!」

うむ、どう考えても聞いた事がある。

「∴: どういうことなの。」

目の前では、得体の知れないうねうねと動き回る気持ちの悪い手と、色んな意味でお世話になっている武将たちが素晴らしい戦いを繰り広げていた。

頭の中がぽぽぽーん、した。

いや、まて、可笑しいだろう。どういうことだ。

待て待て、と誰もそこに居ないのに手で制するようなポーズを取る。

待て、頼むから待ってくれ、訳が分からないよ！

「気に入らなかったか？」

「いや、気に入るも何も——大谷さん。」

「やれ、もっと驚いてみせ。」

「驚きまくってんじゃあじゃすでゆふふ」

「∴そのようよ。」

衝撃的過ぎて、ニヤけ顔のまま顔が固まる。

にたあ、と触手に負けず劣らず気持ちの悪い目を向けていたと思う。

だって目の前に大谷さんが居るんだよ？

じつくりなめ回すような目で見ていたら、非常に憐れなものを見るような目をされた。

「つまり…こういうことよ。ぬしをこちらへ呼ぼうとした結果、訳の分からぬ化け物まで着いて来てしまったということよ。」

「…私のせい？」

「はて…」

私のせいか、そうか。

でも大谷さんと対話してるううう！！

生きてて良かった！万歳！！ひゃっほう！

ぐっ、と大きくガッツポーズをし、ふいと横にいる大谷さんを見たら、見事に消えていた。

「なぜじゃああああ！！」

黒田さん並に叫んでキョロキョロと辺りを見回す。

右…触手に絡まれてる伊達ちゃん。

左…触手を口に突っ込まれてる真田くん。

前…触手に手足を掴まれ、とんでもないポーズの石田くん。

後…触手を殴ってうっかりそのまま腕を巻き込まれ、なんかの液体で服を溶かされてる徳川くん。

「…………大谷すわああん!!」

「Hey! 無視すんじゃないねえ!!」

「知った事か!」

「…ひ、非道でござる…」

「ぎ、斬滅う…んあ…」

「三成—! うあつ、どこに入って、ひゃうっ! ?」

「大谷すわあああん!!」

あられもない格好の武将たちは確かに、大変美味しい。

だがしかし、私は大谷さんを見つけないといけないんだ。

ここまで来て触手×大谷さんを見ないで帰るなんて選択肢は全くな
い。

「はい、はいよ…はい…」

頭上で声がしたので、顔を上げるとそこに居た。

「G J…」

大谷さんは見事に片手と両足を触手に絡み取られ、それを退けようと空いた片手がじたじた動いていた。

うねりうねりとのたうつ触手は、ぬるりとした体液を分泌させ、

それは大谷さんの包帯をゆっくりと溶かしていく。

真上に居るとやや影が掛かるので、少しだけ離れて見る。

「…絶景………」

「ひ、あ…やめ、やめやれ、離れろっ！…く、この…ふぁっ！？ひ、や、や…！」

蠢く触手の内の一つが、ぱっくりと口を開いて大谷の胸の突起に吸い付いた。

じゅるるる

「な、何をし…っい!? ひゃ、めろ、ひ、ひいっ…うあ!」

頭上から、もう少し下へ、地上1メートル辺りで蹴られる大谷さん。

途切れ途切れに切なげな声が漏れ、ふるり、と腰が揺れたのを見逃さなかった。

ごく、

思わず、生唾を飲み込む。

(これ、は)

予想以上に、私が限界だ。

「見てな、で…も、止め…ふ、うん…っあ…」

「ごめ、なさ…ちよ、無いのに勃ちそ…」

「気色の悪い事を言うでないっ!!」

「うえ、あ、すんませ…!」

「前屈みになるな!」

もう少し見ていたい気もしたが、大谷さんに嫌われそうなので止めておいた。

（変態は紳士であれ）

「…で、この触手はどうやったら消えるんでしょうな。」

誰に聞くでもなくゆるく首を傾げれば、地の底から響くような声が聞こえた。

「力を貸してやろう。」

「第六天魔王…さま。」

「信長と呼べ。」

「の、信長…さん。」

「…是非も無し。」

このお人、なんで居るんだろう。いや、好きだけど。おじさん大好きだけど。

その後、松永さんの爆弾をお借りし、風魔くんにそれを仕掛けてもらい、

信長さんの合図で爆発させた。

この辺りは美味しいことはあまりなかったので割愛する。

爆発されると、幾千もの触手を束ねていた花のようなものがびたんと音を立てて地面に倒れ、

その衝撃が他の爆弾に振動を与え、二次災害でえらいことになった。

触手に絡まれ、身動きが取れず終いだった武将たちはそれぞれ天高く投げ飛ばされ、

それぞれの従者、主、仲間、友、捨て駒が受け止めようと下で待ち構えている形となった。

ひゅるる

風を切る音がして、上を見上げると何人もの武将がそれぞれ勝手に何かを叫びつつ降ってきている。

武将が降る。

これは、どこの天気予報でも予報し得ない事だろう。

「うおやかたさぶあぁあ！！」

人一倍けたたましい声を上げていた真田くんは、なぜか下で待ち構えていたお館さまに殴られて

綺麗な放物線を描き、どこかへ消えた。

伊達ちゃんは小十郎を下敷きに着地し、石田くんは本多さんに家康と共に助けられ、

黒田さんはそのまま誰も手を貸す事無く地面に落ちた。

大きな円状の穴がぽっかりとどこまでも続いている。

奥の方から小さく「なぜ、じゃ…あ」と聞こえたが、聞こえないふりをした。

…で、大谷さんはどこだ。

もしかしたら念力で飛んでいるから助けなんていらなんでしょうか。
でもこうやって手を出していたらラピュ〇のシー〇のようにふわり

とやって来たりして。

人が降ってきたら多分こうして受け止めるだろう、と両手を出してみた。

そして、本当に人が降って来た。

「ぎゃはあっ!!」

やって来た衝撃は、ふわり、なんて生やさしいものではなくて、腕が持つて行かれそうになるものだった。

びりびりと腕が指の先までしびれているのが分かる。

生まれたての子鹿のように足を震わせ、それでも落とさなかったのは、

「…ぬ、し…か……」

相手が大谷さんだったから。

つまり、私の腕は大谷さんを抱えている訳で…

（横抱き？お姫様抱っこ？お姫様だっこしてるよ？ねえねえ）

腕の痛みは吹っ飛んでいた。恐らく頭の螺子も数本どこぞへ飛んで行ったに違いない。

「お…」

「お？」

「…お帰りなさい。」

そう言うので、精一杯だった。

降ろしもしないで、ぎゅうう、と腕の檻の中に閉じ込めた。

「貴様アッ！！刑部から離れろ！」

「シーッ！！三成、騒ぐと見つかるだろう！」

「もう見つかってんだろ、お前らのせいだ。」

「は、破廉恥でござるああ！！！！！」

主人公たちが瓦礫の山からこちらを伺っている。

「お取り込み中なんで後にしてもらえるかな！」

くわっ、と勢いをつけて言い切れれば彼らは少し黙ってくれた。

「大谷さん。」

「…あい。」

「酷い目に遭わせて、ごめんなさい…」

想像よりも軽くて、それは多分大谷さんが少し浮いてくれているお陰なのだろうと思った。

ずっと会いたかった人に、今、こうして何のご褒美かは知らないが抱き締めている。

「…降ろしやれ。」

「もうちょっと。」

黙って私に抱き締められている大谷さんは、その包帯だらけの手で、私の頭を少しだけ撫でた。

「もう戻れ。」

「…あい、分かった。」

最後に大谷さんの口調を真似してやれば、目が少し丸く開かれ、薄く細められた。

「大谷さん、大好きです!!」

押しの一手、という訳ではなかったのだけれど、むぎゅ、と腕に力を込めた。

「…我は」

「起きなさいって言うてるでしょ!」

「…なんて良いところで邪魔してくれるんだ……」

目が覚めたら、そこはいつも通り自分の部屋で、抱き締めているのは抱き枕だった。

騒がしく聞こえていたのは、どうやら母の声らしい。

本当に、マンガかと思うようなタイミングで邪魔してくれた。

人が良い夢見てたつてのに…チッ

何かを言いかけていた大谷さん。

それが何なのかは分からないけれど、とりあえず今日も頑張ってみようかな、という気になった。

携帯を開けば、画面の中で不適に微笑む大谷さんに笑みを返して、ベッドから降りた。

寝ぼすけカフェに愛の手を。(後書き)

えー、これ、実は11／22日の朝に見た本当の夢なんですね、ほぼ実話です。夢なので飛び飛びになってしまいましたが、こんな感じの夢でした。

あと、これは我流なのですが、自分の好きな作品やキャラの夢を見る方法を、一応書いておきます。

効果は人それぞれだとは思いますが、私は高確率で見えています。

まず、自分が起きなければいけない2〜3時間前に一度起きて下さい。

その後、好きなキャラ等を思い浮かべて二度寝して下さい。

以上です。

明け方に見る夢は覚えているので、この方法で何度かトリップ気分を味わえますよ。

虫籠ダージリン。

毛利×大谷

地下牢の奥の奥の間に、それは幽閉されていた。

どれほどの間、そこに閉じ込められているのかなど、

日の光も月の光も届かぬ部屋では数えることは出来ない。

そこへ近寄る事を許されたものは、ただの一人も居ない。

また、それを世話するものも。

だが、それに会いに行く者は居た。

しかし、それ、がどれだけ泣き叫ぼうと、許しを請おうと、それは外へは出られないのだ。

運悪く捕まってしまった蝶は、弄ばれて、羽をむしられ、

一本ずつ足を引き千切られていく他ない。

それを所有する飼い主が飽いて捨てるか、死んで捨てられるかするまで…

「なんと滑稽な…」

薄暗い蠟燭の灯が、ぼう、と浮かび上がる中、それは言葉を発した。

否、それ、ではなく、大谷吉継が。

滑稽と笑ったのは、自分を蝶に例え、この牢を虫籠に例え、

そして自分を捕らえた人物を飼い主と例えたからだった。

拷問される訳でもなく、ただ閉じ込められたまま。

無性に笑えて来る、と痩せこけた頬をより窪ませて引きつり、嗤う。

「ひ、ひい…ひひ…」

もう笑うしかない、と気が狂ったように振る舞っても見せた。

しかし、一向に出して貰える気配はなかった。

ならば、何をすれば出して貰えるのかとも問うてみた。

何もせずに、そこに居ろと言う。

一体、何がしたいのかさっぱり分からない、こんなことに意味はあ

るのか。

その問いには、答えはやって来なかった。

そんな大谷の耳に、カツカツと言う足音が届く。

（今宵も来たか）

すう、と目を細めて顔を上げた。

「…毛利。」

「まだくたばってはもらぬようだな、大谷。」

「…出して、くれやれ。」

「ならぬ。」

なにゆえ、

と、大谷の口が動く前に、毛利はその細い体を蹴り飛ばす。

それを正面から腹に受け、壁に叩きつけられた大谷は「あぐ！」と小さく悲鳴を上げた。

ひゅうひゅう、と喉の奥から息が漏れ出すような音がして、

大谷はその場にうずくまったまま意識を手放そうとする。

「そういえば、石田が死んだぞ。」

しかしそれは、その一言で叶わぬ事となった。

「み、つ…なり……？」

「ああ、死んだ。」

淡々とそう告げる毛利の顔には、表情らしきものは何も見えない。

対する大谷はと言えば、目を見開いてカタカタと震える腕で尚も腹を庇っていた。

「う、…」

「嘘ではないぞ。」

口ぶりからは嘘を吐いているようには思えない。

しかし、毛利のことだ。また自分をからかっているのではないだろうか。

そんな思いが脳裏をよぎる。

「うん？確か死んだのはもつと前だったか。」

「…な」

「ああ、そうだ。貴様をここへ入れてすぐにだったな、忘れていた。」

形の良い唇が薄く弧を描く。

「三成、三成…みつ、な…」

「貴様でも泣くのか、意外だな。」

「三成…っ」

大谷の口は、それしか知らないように三成の名を呼び続ける。

毛利はそれが気に入らないとも言いたげに、微笑みを崩して再度大谷に近寄った。

「…や、いや…来るな、…ひ、…！」

乾いてひび割れた頬には雪がこぼれ落ち、パキリと肌が割れる。

「大谷。」

「嫌、だれか…みつなり…みつ」

いやいや、と子供が駄々をこねるように首を横に振る姿を見て、

毛利は立ち止まる。

ふと何かを思いついたように牢から出て行ってしまった。

やや離れたところで牢の扉が開けられる音がし、

程なくしてずるずると何かを引きずる音がこちらへ近づいて来た。

帰って来た毛利がその手に引きずっていたものは、豊臣の兵だった。

「お、た…にさ、ま…げふっ！」

「喋って良いと言った覚えは無いぞ。」

自分と同じく毛利に蹴り飛ばされる男は、助けてくれ、とその目に涙を溜めて大谷を見る。

しかし、その目に映るのは「みつなり」としか繰り返さない人形のような男だった。

「良いか、大谷。よく見ている。」

しゃらん、

と太刀を抜き、その刃を光らせ何の躊躇もなく兵に振り下ろす。

「た、たすげっ」

兵がそれ以上何かを言うより早く太刀を鞘へと収め、あっけなく床に倒れたそれを見る。

返り血を浴びたにも関わらず特に気にもしないと云った風で大谷の横の蝋燭を手にとった。

その火を、今し方事切れた兵の顔へ、と――

じわ、じゅ、

薄皮を炙り、黒くくすぶっていく顔、見るも無惨な姿になっていく兵の前に、

大谷は三成の名を呼ぶことをついに止めた。

その姿が、その炙られた顔が己の顔と重なって、目を逸らせない。

「今…大谷は死んだ。」

顔を焼き切られた兵を踏みつけ、毛利はそう言葉を吐いた。

「も、うり…」

「大谷は死んだのだ。」

その兵を大谷として世間から大谷吉継を葬り去る気なのだろうか。

大谷は堪らず疑問を投げかける。

「なら、…ならば」

「我は、何だと言うのだ…」

「ぬしの前に居る我は、いったい」

「大谷吉継で無ければ」

「何だと」

もう誰も兵に目をかけるものは居なかった。

牢の奥で縮こまっていた大谷は、ずるり、とその足を引きずって床を這い、

毛利の前へと出て来た。

その目は既に泣いてはおらず、白と黒の反転した目で毛利を射貫く。

「貴様は、我が居なくては生きていけぬ蝶よ。」

名も帰る場所も奪い、もはやその体ではどこへも行けまい？

私の腕の中でしか生きられぬのだ。

毛利は優しく語りかけるように言って、大谷に手を伸ばした。

「貴様はもう、我しか選べないのだ。」

どうにも不器用で、捕らえることでしか手に入れたと思えない。

悲しいことに、それは手に入れたはずのものを壊すことでしかない。

しかしそれにも、気付けない。

だから、虫籠に囚われた蝶が、再び空を舞うことは無いのだ。

（愛し方など）

（知らぬ）

アッサムの初恋。(前書き)

※色々と不味いです。

アッサムの初恋。

三成×大谷↑家康

それは、開けてはいけなかったのだ。

気がついたときにはもう走り出していて、キーンと高い耳鳴りが鼓膜を揺らしていた。

苦しい。（胸が、）締め付けられる。

耳にこびりついた嬌声。

三成の肩越しに見えた、あの虚ろな目と、かっちり目が合ってしまった。

『ひ、あ…あゝ…っ…！』

滑稽な程にひくひくと震える身体を三成が下から突き上げる。

じゅ、ちゅ、

と水音が絶えず響いて、耳を塞ぎたくなった。

ぐぢゅっ

いっそう高く突き上げられ、刑部は「ぎあっ！」と悲鳴とも喘ぎ声ともつかぬ声を上げる。

三成の膝の上に乗せられた刑部はだらしなく開いた口からとろりと涎を垂らし、

見るな、と言いたげに首を横に振ってワシを見た。

『は…っ刑部、何を考えている。』

刑部の視線に気付き、三成が振り返る。

——それに見つかる前に、ワシは走り出していた。

自室に戻った途端、残っていた理性は吹っ飛んだ。

早く楽になりたい一心に下だけを脱ぎ捨て、

はち切れそうな程になった自身を掴み、ただ擦り上げる。

気持ちが良いだとか、そんな事を考えてる余裕なんて無かった。

ずっと、好きだった。

憎まれ口しか叩かないようなフリをして、本当は誰よりも豊臣のみんなを好きなお前が。

ワシは三成が羨ましくて、三成になりたくて、

『ヒヒ、相変わらず三成と喧嘩をしておると聞いたが。』

あの声でワシに話しかけていた刑部は、

『やっつ、ああ…！ひやめ、も、はいら、な…』

同じ声で啼くんだな。

人としての欲に溺れる者ではないと、どこかで思っていた。

(けれど)

その両腕は、三成の首に回されていた。

恍惚とした表情さえ浮かべて、切なげにその名を呼んだ。

「刑部」

あれは、刑部ではない別の者だと思ったかった。

それと同時に、あの刑部の身体を暴いたのは自分だとも思ったかった。

「…は、っ…刑部、刑部…」

ずく、と下半身が痺れ左手には白濁した欲がべっとりどこびり付いていた。

つう、と冷たいものが頬を伝って、ぽたりと床に落ちる。

「…刑部。」

「刑部」

空気に晒され、固まりつつある白濁したものを見つめる。

それに塗れて自分の名を呼ぶ刑部を想像していたつもりが、

果てる時に見たのは、いつも通りどこか悪巧みをするような笑顔で

『徳川』

そう呼ぶ刑部だった。

耳鳴りは、まだ止まない。

アッサムの初恋。(後書き)

初めてやっちゃいましたが、大丈夫でしたか？

もうやめて！私のライフは0よ！

なんて方がいらっしゃった場合はご報告下さい。

消します！！

というかこれ…消される可能性が高いですよね↑

遮二無ニルギリ。

三成×大谷

※現代転生（学生）です。

それは唐突に、私の視界に飛び込んできた。

今し方、その電柱の曲がり角を通っていった見覚えのある後ろ姿。

後ろ姿だが、ずっと見て来たのだ、分からないはずはない。

あれは刑部だ。

婆娑羅学園などとふざけた名前だと思っていたが、これは良い学園に違いない。

なぜならば――

私の目の前に居るのが刑部で、その刑部が私と同じ制服を着ているからだ！！

（つまりは、スクールラブコメディということだな、理解した！！）

今すぐに刑部に飛びついてその首筋に顔を埋めハスハスしたい。

だが私は紳士だ。

今は後ろから見るだけで良い。

そうだ、貴様もきっと覚えていることだろう。

何せ私がこんなにも鮮明に覚えているのだ。

そう、思い出してきたぞ。

部屋に忍び込んで見つかった時のあの虫を見るような目や、

禪と替え終えた包帯を盗んだ時のあの罵声と、

刑部が入った時の湯を飲み干した時の数珠の味を――

（刑部は今でいうツンデレだったのだな）

うんうん、と納得したように頷いてハッと気付いた。

刑部はどこだ。

しまった！考えるのに夢中ですっかり遅刻しそうな上に入学式が始まってしまおうだとお！？

叱って下さい秀吉さまあああ!!!!

「やれ、騒がしいのはぬしか、新入生。」

「ああああ…あ？」

しまった、声に出していたようだ。

ところで、この聞き覚えのある声に色気の混じった吐息のような溜息は…

「刑「刑部!どうしたんだ?」

「ああ…家康か。こ奴が迷子のようだな。」

「ははっ、ワシと同じ新入生のようだ。よし、一緒に行こう!」

解 せ ぬ

なぜだ、なぜ家康が居る!

しかもなぜ私の刑部とそんなに親しそうなんだ!?

「ぬしも昔はよく迷子になった。」

「必ず刑部が迎えに来てくれたなあ…あれどうやって見つけてたんだ？」

「ひひっ」

「秘密か。」

まさか。

まさかまさか…！

幼なじみポジ…だと…！？

全身の力が一気に抜けるのが分かった。

がくり、とそのまま膝から地面に叩きつけられる。

「！？お、おい？気分でも悪いのか？」

私の顔を覗き込むこの▲に、思い切り拳をぶつけてやりたいのを抑え、

どうにか立ち上がる。

ふ、ふはは…そうだ、幼なじみはあくまで幼なじみ！

突如やって来た美少女ヒロイン（私）に、

まんまと刑部を寝取られるが良い！！（※だが私が入れる）

「…持病の癩か？」

不安げな瞳が私を見つめていた。

「ああ…すまない、心配を掛けた。」

あくまで平静を装って首を横に振る。

「刑部！急がないと本当に遅れてしまうぞ！！」

「あい分かった。それ、早に走れ。…走れるか？」

「無論だ。」

「ああ、そういえばまだ聞いていなかったな。」

「なんだ？」

「名はなんと言う？」

世界の壊れる音がした。

遮二無ニルギリ。(後書き)

三成が暴走した事をお詫び申し上げます。

ウヴァは待ちぼうけ。

竹中×大谷

「それじゃ、僕はそのまま毛利くんを討ちに行ってくるよ。帰りはあの日輪に乗るのかなあ。」

いっそ秀吉って名前にしちゃおうか。

からかうような笑みを向ける貴方は、とても綺麗で、

我は何も言えなくなった。

ふいに口をついて出そうになる言葉を何度も飲み込んで、

その度にずきりと胸が痛む。

（いっそのこと、我が全ての病を背負えたなら）

そうであったなら、この儚げに笑う人は幸せだったろうか。

「そんな顔しないでよ、行きたく無くなるじゃないか…」

白頭巾を退けて髪を撫でる半兵衛さまは、やはり美しかった。

白魚のような指がするりと髪の間を滑り、ひび割れた顔に触れる。

愛おしそうに目を細めて、また髪を撫でるの繰り返し。

（引き留めたい）

行きたく無くなるのであれば、ここに残って欲しい。

代わりに我が、我が毛利を――

「吉継くん。僕と居る時に他のことを考えるのは関心しないなあ。」

「…そんなつもりは…」

「分かってるよ。でも、残りの時間を秀吉のために使いたいんだ。」

ああ、この方は、全て分かっている。

我の思うことも、己の死期も…

「でもね、吉継くん。僕は確に残りの時間を秀吉のために使いたいけど、

もう少しだけ君と一緒に居たいんだ。だからさ、君の時間を僕にちょうだい。

今の君の時間、せめてここを出るまでは、

君は僕の、って思っても良いかな？」

薄紫色の瞳が、見透かすように我を映した。

「半兵衛、さま…」

「なあに、吉継くん。」

（行かないで、なんて）

（口が裂けても…）

痛むばかりの胸は悲鳴の代わりに言葉を吐き出す。

「待ちます。」

あれから、半兵衛さまが行方不明になられて、いくらか経った。

三成は秀吉さまを討った者を討たんと躍起になり、豊臣は崩壊を始める。

下弦の月がそれをあざ笑うかのように弧を描いては我らを見下ろしていた。

「良い月だねえ、吉継くん。」

今にも、すぐ隣でそう聞こえて来そうで、無意識の内に目を瞑った。

（あの時、無理にでも引き留めていたなら…）

待つ、と言ったところで、もう帰っては来てくれない。

それでもどこかで、期待をしていた。

さわさわと柳を揺らした風が当たる。

「…、…て…」

それがまるで人の声のように聞こえて、思わず動きを止めた。

風は、いつかの半兵衛さまがしてくれたように頬に触れ、我を包んでいく。

「待ってて、必ず迎えに行くから。」

柔らかい感触と、泣き崩れる我を残して、風はどこかへ去ってしまった。

（あとどれだけを待てば、貴方へ辿り着けますか）

答えは無い。

「遅くなってごめんね。」

「ひ、ひ…まさか400年も待たされるとは思いませんだ。」

「これからは、ずっと一緒だね。」

「…あい。」

生誕ディンブラ。

黒田×大谷

※現代設定

はっぴばーすでーとうーゆー

はっぴばーすでーとうーゆー

はっぴばーすでーでいあ

「くーらー♪」

やけにキラキラした笑顔を浮かべて、

ホールケーキを思い切り小生にぶつけようとしている男の手を掴んだ。

「待て！小生は今日誕生日だぞっ！？なのになぜ普通に祝ってくれんのだ！！」

どうにかホールケーキは事なきを得て、机の上に大人しくしている。

「ひひっ！」

なんだってんだ、小生は誕生日すらマトモに祝って貰えないのか……！！

いや、まあ……風切羽や北条のじいちゃん辺りはちゃんと祝ってくれてたか。

「そうそう、暗……我はプレゼントを用意してやったのだが。」

「……お前さんからのプレゼントなんて、どうせロクなもんじゃないに決まってる。」

ケーキがこれ以上被害を受けないように、と切って皿に取り分けた。

このケーキだってな、本当なら風切羽や北条のじいちゃんと一緒に食べるはずだったんだがなあ……

あーあ、小生はツイてない。

なんで誕生日にまで刑部にいびられにやならんのだ。

「ほれ、刑ぶっ……！」

皿を刑部に渡そうとしたところ、顔面に何かが飛んで来た。

「ぬしの生まれた日なぞ、祝ってたまるか!!」

捨て台詞を吐いて、どたどたと騒がしい荒しは去っていく。

うっかり落としたけた皿を再び机に置いて首を傾げた。

「な…なんだあ？」

顔にぶつかってぼとりと落ちたそれは、床で包装が解ける。

見れば、暖かそうな茶色の手袋が、きちんと並んで落ちていた。

「ほ、本当にちゃんとしたプレゼント、だった、の、か…」

がくり、と力が抜けて床に膝をつく。

その振動が伝わったのだろうか、フォークは批難めいた音を立て床に落ちた。

「ああ、やっぱり小生はツイてない…」

（最悪のバースデイだよ、全く）

（こんな日くらい、一緒に過ごしたかったのによ）

「…暗め…」

（ぬしの誕生日なぞ、祝ってたまるか）

（ぬしさえ生まれてこなければ）

（我はこんなに）

（苦しい思いをせずに済んだ）

生誕ディンブラ。(後書き)

官兵衛さん誕生日おめでとう!!

リクエスト1 (前書き)

フランキーさんからのリクエスト
Pandora Hearts
より、
ブレイク×レイム

リクエスト1

「っの、バカ!!」

振りかぶった手を机に叩きつければ、ハラハラと数枚の書類が落ちた。

どれもこれも全て、ブレイクの仕事だ。

あいつ、目が見えなくなったのを良いことに

今まで溜め込んできたのも押し付けているんじゃない？

ふと脳裏を過った考えは、恐らく間違っではないだろう。

なぜなら、今ちょうど拾い上げた書類には、半年以上前の日付があったから。

「~~~~ツッ!? バカか!!」

「さっきから、そればかりですネ。」

棒付きキャンディを口に含んだザクスが、机の下から這い出てきた。

「ヨイシヨ、つと。」

「…まさか、ずっとそこに居たのか？」

「マサカ。君が諦めて出て行くのを待って居たんです。」

ふう、やれやれ、と肩を竦めてみせるザークシーズ。

だが、ここは私の部屋だ。

「…邪魔でもしに來たのか。」

眉を顰めると、盛大に溜息を吐くザークシーズが目に入った。

「バカは君の方ですネ。」

思い切り鼻で笑われ、文句の一つや二つやいっそ十くらい言っ
てやろうと近寄ると

ふわりと甘い匂いがした。

けれど、それは、今さっきブレイクが舐めていた棒付きキャン
ディとは違う香だった。

「…カップケーキ？」

「よく、分かりましたネ。」

パチクリ、と目を瞬かせるブレイクは、バツが悪そうに紙袋を背中の方に隠す。

「…休憩しよう。」

「ハイ？」

「お茶にすると言ったんだ。」

（どうせそのつもりで来たんだろう？）

日も落ちて、どう考えたってティータイムには間に合っていないけれど、

私たちは書類を放り出してテラスに出た。

「良い香りですヨ。」

私の淹れた紅茶を緩んだ表情のザークシーズが見つめる。

「カップケーキは？」

「もう食べちゃいました。」

「嘘だな。」

「…美味しくありませんヨ。」

「食べてから決めれば良いことだろう。」

妙だ。

お気に入りのお菓子を持ってくる奴ではないし、

そもそもここで出るお菓子に不味いものはないはず。

「…手作り…いや、まさか。」

流石に無いだろうと首を振りつつザークシーズを見れば、目を逸らされる。

「…え。」

「食べたきゃ食べれば良いデショウ！！」

カップケーキの一つを思いっきり口に突っ込まれ、むせ返る。

「ぐふあっ、ん、ぶ…ざくふ、…！」

中に入っていた生クリームが舌の上でとろけ、喉の奥に滑り落ちる。

ごくっ…ん

私は口を、ザークシーズは手をクリームまみれにして、騒がしいお茶会が始まった。

「…美味しい。」

「お世辞は結構デス。」

「人がせっかく褒めてるのに…！」

「褒めて欲しいなんて言いましタっけ？」

ふん、とそっぽを向くザークシーズ。その手にはカップが包まれていて、

傷付いた指先を温めているようだった。

切り傷か何か、更に軽めの火傷と打撲。

カップケーキを作るのに払った犠牲は、どうやら少なくないらしい。

分かり辛いけれど、恐らくは私を休ませに来てくれたんだろう、

そう思うとなんだか笑えて来た。

だって、あの、ザークシーズが手作りカップケーキを持って私の部屋に来るなんて。

「どうしたんです？ ニヤニヤして。」

「なっ、ニヤニヤなんてしていない！ それより、クリームが付いているぞ。」

ひょい、とザークシーズの口元のクリームを指で掬い取る。

「あー、だめデス。」

私の手を取り、ザークシーズはそう言った。

ぱくっ

何が、と口を開く頃には、私の指はクリームごと奴の口の中。

「な、…」

頭が追いつかない。

（ザクスが私の指を、舐、め…てる？）

ざり、とした舌の感触に、ようやく我に返る。

「…ザークシーズ貴様ッ！！」

腕を思い切り引いているのに、全く動かない。

指から伝わるザークシーズの舌は、やけに熱っぽかったような気がする。

クリームを舐め終えたザークシーズが、ようやく口から私の指を解放した。

ちゅ

と、指先にキスをして、

「ご馳走サマ。」

「ば、バカザクス!!」

「俺は何も見えていない、俺は何も見えていない、俺は――」

「やあ、ギルくん。…何を、見たんデス？」

茶会も過ぎた真夜中、ギルバートの悲鳴が響き渡ったという。

（オズを探してただけなのに！）

リクエスト1（後書き）

このように、リクエストして貰えば、大体書きます。

して下さいな。m (|) m

リクエスト2（前書き）

フランキーさんからのリクエスト
君と僕。

より、

祐希と要

リクエスト2

やっぱり、慣れない。

香水、化粧、制汗スプレー？

もう、吐きそう。

「悠太、むり…。」

「分かった、行っといで。」

ゆるく頭を撫でられてから、悠太の肩から頭をどけ、反対方向に歩き出す。

向かうは、屋上。

「なんで居るの。」

「お前こそ。」

開け放った扉の向こうは、自分を歓迎していなかった。

給水塔の上、お気に入り場所にはメガネが居る。

「酔った。」

「へえ。」

「要センセ、サボり？」

「誰が先生だ、誰が。」

要の横に真後ろに座って、椅子代わりに寄り掛かってやった。

「…おい。」

「サボってたって、言わないから。」

これくらい良いでしょ、と思い切り体重を掛けてやった。

ぐえ、なんて潰れたカエルみたいな声が聞こえたけど、気にしてあげない。

すう、と息を吸い込んで、空を仰ぐ。

「…寝んなよ。」

そよぐ風が、前髪をなぞった。

ガチャ

「！」

「！」

誰かが、屋上にやって来たらしい。

（誰だろ…）

こっそり覗けば、春と千鶴だった。

声を掛けようとした要を止める。

（なんだ？）

（サボってるの、バレるよ）

ジェスチャーで会話をし、仕方なく二人を見守る。

「…あーのさっ、春ちゃん、ゆうたんのこと好き？」

「ふえっ！？え、え、そ、それは好きだけど…」

「じゃあゆっきーは？」

「す、好きだよ！」

「なんだありゃ。」

「良かったね、要のことも好きだって。」

二人のやり取りは、あと何回か続いて、ようやく

「じゃあ、メリーは？」

その質問に至った。

（遅過ぎでしょ）

「膝、貸して。」

春が何かを言う前に、要の腰辺りを捕らえてそのままうつ伏せになる。

仰向けだと眩しいから。

「は？おい、なんで「静かに。」

お腹を枕にしてるから、脚が少し邪魔だった。

「…お休み。」

文句なんて聞こえません。

千鶴には悪いけど、まだ今は進展して欲しくない。

このままが好きだから、もう少しだけ、知らないフリをさせて。

俺以外は気付かなくて良い。

特に要は。

くつつけようとしそうだから。

だから、さっきの二人のことは、世間話で済ませておいて。

いつの間にか、春と千鶴は屋上からいなくなっていた。

「…ったく。」

一定のリズムで上下する肩。

毎日顔を合わせていても、寝顔はそれなりに貴重だ。

整った顔立ち。

長いまつ毛が、風に揺れる。

「気付いてねーのは、お前もだろ。」

自分の事に関しては、無関心なこのバカは、人の気も知らないでグ
ースカ寝やがって。

（あ、髪、柔らけ）

給水塔に寄り掛かって、気付いたのはお昼のちよつと前。

ポケットで振動するケータイを取り上げると、メールが届いていた。

差出人…浅羽 悠太

(件名なし)

20xx年11月7日12…40

あげないよ。

「上等。」

ケータイをしまつて、祐希を起こす。

(さっさと起きろ)

(んーむにゃむにゃ、もう食べられない)

(…わざとやってんだろ)

リクエスト2（後書き）

お兄ちゃんの方が隠れ超ブラコンだと美味しいんです、はい。

リクエスト3 (前書き)

朱雀卅さんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

元親×政宗

リクエスト3

「怖えなら、目え瞑ってろ。」

「…っ、う」

「…んなに怖え？」

「てめっ…！」

「あ、ズレた。お前がシテ欲しい場所はそこじゃねえだろ。」

「や、あ…も、いい…」

「へーきだって、俺上手いだろ？」

「っるせ…下手くそ。」

「泣きそうな顔して強がんなよ。」

「…お前、楽しんでるだろ。」

「おう。」

「ピアスの穴開けんのに何十分掛ける気だ、バカ。」

「いくぞ。」

「い、ちいち、言うんじゃね、え…ひっ！あ、あ…！！！」

「ちょっと血ィ出たわ、ワリ。」

「てい、ティツシュ！」

「ん？舐めときゃ良いだろ。」

「だ、だからって本当に舐めんじゃねえ！！！」

「よっし、キレイにできた。」

「もうテメエには頼まねえからな。」

「なんでだよ、キレイにやっただろ？」

「うるせえ！！！」

リクエスト3（後書き）

なんぞこれ↑

書いといてなんだが、

バカは私です。

リクエスト4（前書き）

フランキーさんからのリクエスト
オリジナル設定を頂きました。

鮎川×柳

リクエスト4

上司と部下。そして、男同士。

付き合うとか、可笑しいんだ。こんなの。

「おっはよー、やーなぎちゃん。」

ヘラヘラ笑いながら、いつも遅刻すれすれに出社してくるこの人は、

「おはようございます、鮎川部長。さっさと仕事して下さい。」

僕の恋人、らしい。

「きつびしー！そんな真面目なところも好きだけどー。」

「寝言は寝て言って下さい、そんなことより、仕事です、仕事。」

「仕事と俺、どっちが大事なのさっ！」

よよよ、と口で言いながらしなり、とお姉座りする。ちなみに、

僕の机だ。

「はぁ…仕事してくれる人が大事です。」

「任せて！」

お世辞にも、可愛い台詞なんて吐けない僕。

それでも鮎川さんは、なんとなく分かってくれてるらしい。

ふんふんと鼻歌なんか歌いながら、物凄い速さでキーボードを押していく。

…さすが、部長と言うだけありますね。

「あ、柳くん、専務が呼んでたよ。」

「…。」

「柳くん？」

「…え、あっはい！」

「はは、専務が呼んでたっての言いに来ただけだねー。」

「すみません、すぐ向かいます。磯貝さん。」

見とれてた、かもしれない。

仕事ぶりに、そう、あくまで仕事ぶりに見とれていたんだ！

悔しくて鮎川さんの居るデスクを見ると、ニヤニヤ笑いながら投げキッスを送られた。

くそっ、いつか見返してやる…

今は、それよりも呼び出しを受けないと。

…専務が、何の用事なんだろう。

「柳です、失礼します。」

「ああ、来てくれたか…」

誰も居ない倉庫に呼び出されるなんて、僕は何かしてしまったのだろうか。

「そう固くならないで、今日はちょっとお願いをしたくてね。」

「お願い、ですか…？」

白髪交じりなのに、どこか若く見える専務は、目を細めて笑った。

「君は、あー…鮎川くんと仲が良かったよね？」

「い、いえ！そんなことは…」

周りから、そんな風に見られているんだろうか？

僕は一気に緊張した。まさか、まさか…バレているなんて、もしそうだとしたら…

「良いんだよ、上司と部下の仲が良いということは、とても好ましいことだ。」

「あ、ありがとうございます。」

良かった。そういうことでの呼び出しではないようだ。

ホ、と安堵の溜息を漏らす。けれど、その吐き出された溜息を、僕はすぐに飲み込むことになる。

「で、頼み事なんだけどね、私の娘と鮎川くん、ちょっとお見合い

でもしてくれないかなあ、と思ってね。」

「…へ？」

お見合い？誰が？鮎川さん？なんで、僕が居るのに、

「何回かそういう話はしたんだけどねえ、彼、ノってくれなくてさあ。君からも一言、言ってくれると有り難いんだけど…どう？」

「…。」

鮎川さんが、お見合い…ゆくゆくは、結婚、とか。

ぐるぐると頭に浮かぶのは、綺麗な家の庭なんかで、子供たちと楽しげに遊ぶ鮎川さん。

その横には、顔の見えない女の人。

「柳くん？」

「は、い…言ってみます。」

「そう、それは良かった。それじゃ、もう戻って良いよ。」

半ば放心状態で職場に戻る。来る前と同じ景色なのに、どこか灰色

が か っ て い る よ う に 見 え た 。

（お見合いのこと、鮎川さんに言わなくちゃ…）

言いたくない、言いたくない、けど…鮎川さんは、そうした方が、
幸せなのかな。

「柳くん、顔色悪いけど…大丈夫？」

「……黒川さん…」

誰かに話を聞いて貰いたかったけれど…そんなことしたら、困る
のは僕たちだ。

「なんでもないんです。すみません…」

（こんな時、鮎川さんなら）

どうしたら良いのか分からない時、いつも浮かんで来るのは鮎川さ
んだ。

僕は、情けない。

女々しくて、こんな風になりたかった訳じゃないのに。

「…鮎川さん…」

「呼んだ？」

思わず名前を口にしたら、どこから沸いて出たのか、鮎川さんが目の前にいた。

ただし、まるでオマケみたいにくっついた女性社員と一緒に。

「鮎ちゃん先輩、きっと邪魔になっちゃってるんですよ。」

「ええっ！？ 本当かい。鈴ちゃん！」

「ほら、あっち行きましょ。」

（やめろ、触るな）

僕の、鮎川さんに…触らないで。

腕を引く鈴という名の女性社員も、されるがままの鮎川さんも見てられなくて、

挨拶もなしにそのまま早足で通り抜けた。

(嫌だ) (嫌だ) (嫌) (いや) (鮎川さん)

汚い、感情。気持ちが悪い。僕ばかり、好き、みたいで。耐えられそうに、無い。

地下の、印刷用のコピー用紙が置いてある個室に、転がり込むようにして入る。

いつの間にか、全速力で走っていた。

じつとりと汗ばんだ手を見つめて、握りしめる。

(怖い)

怖い、鮎川さんが、僕の元から去ることが。

鮎川さんが、結婚する時、僕はきつと、掛ける言葉どころか、会わせる顔すら、無いだろう。

「…鮎川、さん…」

返事は、帰って来ない。

振り切って来たのだから、当然だろう。後ろを振り返っても、鮎川

さんは居なかった。

居ない、居るはずがない、居たって困る。

こんな顔、見せられない。僕は、声を押し殺して膝を抱えた。

（鮎川さん、鮎川さん）

「呼んだ？」

頭上で声がして、反射で顔を上げれば、息を切らした鮎川さんが、居た。

「…な、んで、」

「呼んだデシヨ？あー…疲れた。」

無遠慮にどさ、と僕の横に座って、息を吐く。

「呼び出しの後から、様子がおかしいけど…なんかあった？」

「…専務の娘さん、と…お見合い、しないんですか？」

睨むように横を見れば、鳩が豆鉄砲食ったような顔をしていた。

「…柳ちゃんは、さ…俺がお見合いしても良いの？」

（して欲しくない）

そう思っているのに、どうして僕の口は、本当のことだけ言えないんだろう。

「勝手にすれば良いじゃないですか。」

「あ、っそ。」

突き放すような言い方で、その声は、とても冷たくて。

僕にだけ好きと言ってくれた鮎川さんが、どこかへ行ってしまうような気がして、

気がつけば、僕の手は鮎川さんの手の上に重ねられていた。

「…柳ちゃん。」

「したいなら、すれば良いじゃないですか。」

きつと僕の手は震えている。声も。

「本当に？」

鮎川さんの指が、僕の指に絡む。

「…ッ」

ぎゅう、と握りしめるように手に力を込める。

「言ってくれなきゃ、分かんないよ。」

「嫌だ、お見合いなんて、しないで…っお願いしま、あゆかわ、さ…」

顔と同じで、ぐしゃぐしゃになるばかりの言葉。みっともない泣き声が、少し響いた。

「ね、柳ちゃん。俺のこと…好き？」

「分かってるくせに、聞くんですか。」

「うん。」

この人には、きっと一生敵わない。

「…好き、です。大好き、…」

繋いでいた手を引っ張られて、ぽす、と鮎川さんの胸に引き込まれる。

手は繋がったまま、空いた手で髪を優しく撫でられた。

「…柳ちゃん。」

ゆっくりと顔が近づいてきて、ぎゅう、と目を瞑る。

ぱちんっ

額に、軽い衝撃と、けたたましい笑い声。

「かわいー！ふふ、引っかった。」

いわゆる、デコピンという、下らないものに…僕は引っかかってしまったらしい。

「もう知りません！」

せっかく勇気を振り絞ったのに、こんな風に茶化されて、腹立たしくて、悲しくなった。

手を振り払って鮎川さんから顔を背ける。

トントン

肩を叩かれて、苛々しながら振り返る。

「なんです」

僕の言葉は、鮎川さんの唇で塞き止められた。

「…引っかった。」

ああ、もう、だから：

(そんなに綺麗に笑わないで)

後日談

社長室には、二つの湯気を上げるコーヒークップ。

「…で、結局部長くんの言う通り動いたって訳かい？」

「社長だって応援してたでしょうに。」

「自然の成り行きを見守っていたんだよ。」

「これも必然と思えば良いでしょう？」

社長と呼ばれた男は釈然としない様子で専務を睨み付けた。

「嘘吐きめ。娘なんていないくせに。」

「はいはい。私には貴方だけですよ。」

「…減給してやる。」

「怖い怖い。」

…そんな会話があったとか。

リクエスト4（後書き）

いつもリクエストありがとうございます、フランキーさん。
もとい、私の友人さん。

ご希望には添えましたか？

閲覧感謝です。

リクエスト5（前書き）

朱雀卅さんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

佐助×政宗

リクエスト5

大将と竜の旦那は自他共に認める好敵手。

蒼紅永劫なんて言われてて、俺様としてはちょっと複雑。

だって、それってさ、俺様の入る隙間がないってことじゃん？

大将のオマケみたいにしないでよ。

アンタ、自分が誰の物かもう忘れちゃったの？

「Hey、猿。」

「なに。」

語尾を上げずに、首も傾げずに、ただ見下ろす。

俺似組み敷かれている竜の旦那はとっっても不機嫌そうに俺様を睨んでいた。

アンタの目、好きだよ。でも、その目じゃない。

「何じゃねえよ、退け。」

「嫌、って言ったら…?」

「力尽くでも。」

思わずぷつと吹き出してしまった。

それを見て、もっと顔をしかめる竜の旦那。

「Ah? 何笑ってやがる。」

「ははっ、やー…ごめん、こんなに簡単に押し倒されてるのに、って思っちゃって。」

ホント、笑っちゃうよね。

俺様

こんな、一人の人間に執着するなんて掟破りも良いところ。

元々忍んでないから掟がどうか言える立場じゃないけど、

それでも、もっと上手く感情を隠せてると思ってた。

正直、むりだわ。

首筋の辺りに顔を埋めて、そのまま動くのを止めた。

血と汗と、硝煙の匂い。死臭。

俺様と、おんなじ。

気がついたら、その真っ白な首もとに噛み付いていた。

ぶつ、と歯が肉を突き破る音がして、真っ赤な鮮血が色を付ける。

赤

朱

紅

「こんな時まで、邪魔しないでよ…」

ねえ、大将。

俺は、アンタの忍だけど、譲れないものだってあるんだから。

ホント、笑っちゃう。

我を忘れたように、ただひたすらにその紅を舐めとって、飲み下す。

その色で竜の旦那を染めないで、なんて、馬鹿馬鹿しい。

ごく、ん

舌を這わせるたびにびくりと竜の旦那の体が跳ねた。

かーわいー

満足げにその様子を眺める。

キツと鋭い眼光が俺様を貫く。そう、その目が好きだよ。

アンタが見るのは、俺様だ。

じわり、と紅が滲む程度になってきたら、そこに口づける。

鬱血するくらいに吸い上げれば、暗赤色を中心に、花が咲く。

この赤なら、嫌いじゃない、かも。

「Stop!! いい加減にしろ!」

髪の毛を掴まれて、引き剥がそうと引っ張られる。

つとに、これで禿げたらアンタのせいだよ。

「そんな顔して言われても、嫌がつてるようには見えないけど？」

頬を染めて、運動した訳でもないのに息が上がってる。

それを指摘してやれば、口をパクパクとさせて顔を逸らされた。

こっち向いて。

「まったく…血で盛ってんじゃねえよ、猿…」

「竜の旦那でしょ？」

ごめんね、と軽く謝りながら退こうとすると、胸ぐらを掴まれて

引き寄せられる。

澄んだ眼が、その中に欲の色を隠しもせずに俺様を映す。

「責任取ってけよ？」

「…仰せの俤に、ってね。」

リクエスト5（後書き）

サスダテ難しい！

とにかく伊達さんが難しい！

はい、白状します、正直伊達さん苦手です。
グダグダで申し訳無い。

リクエストありがとうございました。

リクエスト6 (前書き)

桜耀さんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

家康×三成

リクエスト6

※学バサ設定。

ふわりと香るのは、イチゴの香り。

甘くて酔ってしまいそう。

放課後、教室内は自分一人だった。皆、部活に行ったり帰宅をしたのだろう。

生徒会の無い私は、家に帰るバスが来るまでの間、ここで時間を潰す。

図書館へ行こうかとも思ったが、今日はやめておいた。

ガラッと扉が開き、けたたましい声と共に誰かが入って来る。

「宵闇の羽根のか…た？はれっ！？占いでは確かにここに居るって出たんですが…！！！」

キヨロキヨロと教室内を一通り見回すのは、115の鶴姫だった。

騒がしいと言文句を言ってやろうと立ち上がる。

「あ、石田さん。」

「あ、石田さん、じゃない。ここに風魔は居ない、早急に自分のクラスに帰れ。」

「ううゝ…でも確かにここって出たんですよ!」

「知った事か。」

「はっ! もしや…」

訝しげな表情で見上げられ、なんだと首を傾げる。

頼むからさっさと帰ってくれないだろうか。

私は騒がしい女子のノリとやらについていけない。

「…宵闇の羽根の方、石田さんに化けるなんてしてませんよね?」

「馬鹿か貴様は。私はどう見ても私だろう。」

「それはそうなんですが、ちょっと確認させて下さい!」

ぐわし、と両頬を掴まれ、思わず唾然とする。

馬鹿だ、馬鹿が居る。どうにかしないといけない馬鹿が…
ぐにぐにと縦横斜に引っ張られ、流石に手を叩き落とす。

「むむ…やっぱりそれはマスクじゃないんですね。」

「当然だ。」

「それにしても、唇が乾燥してカサカサしてますよ？」

「余計なお世話だ。」

「お邪魔しちゃったお詫びに、これあげます☆」

手提げから取り出したのはまだ開封されていないリップクリーム。

「男がつけるものでも無いだろう。」

「そのまま放って唇が切れちゃっても知りませんよ？」

強引に押しつけられ、突き返そうとすれば、既に廊下で手を振っていた。

「ではっ、私は宵闇の羽根の方を探さないといけないのでッ!」

女というものは面倒くさい。そして押しが強い女には関わらない方が良い。

これが今日、私が学んだことだ。

くそ、どうしろと言うんだ、これは…

誰かに押しつける事もできたが、唇がカサついているのは知っていたし、

捨てるのも悪いと思ってしまった。

一応、周りを見回してから包装を破る。香り付き、という文字が真っ二つになった。

蓋を外してやると、自分の周りいっぱいイチゴの匂いが漂い始める。

その甘ったるい匂いに顔をしかめつつ、唇にそれをあてがった。

色も味もついていないのに、匂いだけがしつこくまとわりつくようで、

すぐにでも拭ってしまいたくなった。

がらっ

再び扉が開き、またあの女かと思って振り返れば、別の人物が立っていた。

「ああ、やっぱりここに居たんだな、三成！」

「家康か、何のようだ。」

もう秋も深まってきたというのに、片腕を捲っていて寒くはないのだろうか。

心配している訳ではない。うつされたら嫌だという意味だ。

「？何をブツブツ言っているんだ？三成。」

「いや：なんでもない。」

首を横に振ってから緩く傾げる。

「で、何の用だ。」

「一緒に帰ろう！」

「…………許可しよう。」

雲行きも怪しくなってきた。

バスで帰るよりもコイツの自転車の方が早いし、何より代金が掛からない。

自分に言い聞かせて、鞆を持ち隣を抜ける。

ふわり、とまたあの香りが私に合わせて移動した。

「ん？甘い匂いがするな。」

「ああ…さっきリップクリームを塗った。要るならやるぞ？」

「良いのか？」

「私が持っけていても仕方無いだろう。それに、匂い付きだった。」

ぼい、と無造作に家康の手にそれを置く。

じゃあ遠慮無く、と蓋が開けられ、家康の口に近づいていく。

ふと家康が動きを止めた。

なんだ、やはり要らないのか？

「間接キスだな、三成っ！」

「なッ……！！馬鹿か貴様は！やはり返せ……！！」

「嫌だ、絶対に返さない。」

「イイエエエヤアスウ……！！」

騒がしく通り過ぎていく二つの影を、

とある無口な新聞部員がベランダで見送っていたことを、二人は知らない。

後日

「貴様ッ……！！まだそれを使っているのか！」

「使い切るつもりだ。」

「今すぐに捨てろ！斬滅されたいか！」

イチゴの香りがする度に怒声が響き渡ったとか。

（なんなら、ワシが口移しで塗ろうか？）

（イイエエエヤアスウウ！！）

（ほら、叫ぶから唇が切れた）

（ま、待てッ！）

（許可できないな）

香り一つに反応して、振り返ってしまう自分が恥ずかしい。

同じ香りだと、ずっと一緒に居るみたい。

近くに居ても、離れていても、必要以上の意識をしてしまう。

そんなものです。

リクエスト6（後書き）

なんぞこれ。またも、なんぞこれ。
ここで一句。

甘々を 目指したはずが 空回り

桜耀さんリクエストありがとうございました。

リクエスト7 (前書き)

ちいさいわんこさんからのリクエスト
君と僕。

より、

悠太×春

リクエスト7

「…髪、伸びたね。」

何気なく、今日は良い天気だね、と言うように、そう言われた。

「え、そう？」

「うん、伸びた。」

切らないの、と暗に言われている気がして、思わず俯く。

前髪を親指と人差指でつまんで、ちょい、と弄る。（そんなに伸びたかなあ？）

前は無理矢理切ったくせに、今になって強制はしない、なんて、なんだかずるいと僕は思った。

だって、（だって？）

だって、なんだったんだろう。

僕は自分の考えてることすら、時々よく分からない。

「…伸ばすの？」

「どうしようかな。」

「ふうん。」

何が、ふうん、なんだろう。

だから、悠太くんの考えてることは、何一つ分からない。

「…ねえ。」

「うん？」

「切ったげようか。」

「ふえ？」

「髪。」

俺が切ってあげるよ。

と、やっぱり何でも無いことのように言う。

じゃあお願い、と、ちゃんと答えられたか自信がない。

ただ、掌は汗びっしょりになって、顔がとっても熱かった。

（髪を切る、だけ）

それだけの事なのに、何を緊張するって言うんだろう。

しょきり、しょき、

軽くなった癖毛が、くるりと丸まって新聞紙を置いた床にぱさりと落ちる。

薄く目を開いてそれを見下ろす。（くるくる）

部屋には、僕と悠太くんしか居なくて、僕は椅子に座って、

悠太くんが本当の美容師さんみたいに髪を切ってくれている。

服に付かないように、と自作のビニールカバーを肩に掛けて、じっとする。

「目、瞑って。」

「あ、うん。」

前髪に手を掛けていたから、きっと前髪を切るんだろう。

ちら、と見えた真剣そうな目にどきりとした。

しよき、しよき

鋏の刃が髪を裂いて、重なり合う音だけが聞こえる。

真っ暗な中、悠太くんがどんな顔をしてるのか、気になった。

何を考えて、こうしているんだろう。

ただ、見ていて鬱陶しいから切っただけ…かな？

しよきん。

「髪落とすから、まだ開けないでね。」

「うん。」

後ろ髪、両耳の付け根、つむじ。

手がさらさらと髪の毛を梳いていく。撫でられているみたいで、なんだかくすぐったい。

前髪に手が掛かって、同じように指と指の間に髪の毛が通っていく。顔にいくつか付いてしまったらしく、悠太くんの手が頬の辺りを撫でた。

そのまま、動かない。

（もしかして、失敗しちゃったのかな…）

坊主頭にされた自分を想像して、思わず小さく息を飲んだ。

悠太くんは、頬にやっていた手をまた前髪に戻して、

オールバックにするように持ち上げた。

ふにゅり

指の腹とは違う、もっと、柔らかい感触が、額に落ちてきた。

「終わったよ。」

「え、あ、うん。」

何ごとも無かったかのように、落ちた髪の毛を新聞紙と一緒に丸めている悠太くん。

さっきのは、なんだったのかな。

分からないことだらけの中で、一つ分かるのは、悠太くんの耳がちよっと赤かったこと。

胸がときどきしちゃうのも、悠太くんを見て苦しくなっちゃうのも、

どうしてなのか（誰か教えて）

リクエスト7 (後書き)

なんでしょうね、これ↑

キミボクは書いていて非常に楽しいですが、期待に添えられる出来ではないです、はい。リクエストありがとうございました。

リクエスト8 (前書き)

ちいさいわんこさんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

佐助×伊達

リクエスト8

旦那と一戦交えに、今、竜の旦那が甲斐まで来ている。

俺様は程々のところで止めなきゃなんないから、木の枝に逆さにぶら下がって見物って訳。

「飽きもせず、よくやるよねえ…右目の旦那もそう思わない？」

「政宗さまにはもう少し大人になって頂きたいものだ。だが…」

「だが？」

「真田の、あいつの前だけで子供みてえにはしゃいでんだ、多目に見るさ。」

「…右目の旦那ってば、おっとなー…」

旦那の前だけ、ね。なんかムカつく。

それに、俺様はそうは思えない。本当に子供みたいなんだよね、竜の旦那ってさ。

そのうち旦那に飽きて別の処に行くんじゃないか、って時々思う。

好敵手なんてのは名ばかりなんじゃないか、って。

「猿飛。」

「なに？」

「殺気くらい隠せ。」

「…はは、ごめん、つい。」

「言っておくが政宗さまの背中には」

「アンタが預かってんでしょ、知ってるよ。」

それに、これは殺気とは違うんだよね…

なんていうか、旦那じゃなくて俺様が竜の旦那の好敵手なら良かったのになあ、って、

羨ましいのかもなあ…真っ向からぶつかってける相手が居るってのが。

大きく溜息を吐いて地面に降り立つ。

ぶら下がってたせいか、頭に血が上ったみたい。

くら、と脳みそが揺さぶられたような気がして少しふらつく。

あ、でもそろそろ止めなきゃ。旦那の動きが少し鈍い。

俺様は槍と刀を交えてる二人の間に手裏剣を投げた。

「はい、しゅーりょー!!」

ぱん、ぱんっ

と軽く手を叩いて声を掛けた。

「Ah? まだ終わってねえぜ。」

「佐助えっ! なぜ止めた!!」

「はいはい、旦那たち、仲が良いのは分かったけどー…もう夕餉の刻だよ?」

夕餉、と一言言えば旦那の目付きが変わるのが分かった。

あー…ホントに食欲旺盛なこと…

「帰るぞ佐助えっ!!」

「はいはい。」

手をひいらひらとやる気なく竜の旦那たちに振って背を向ける。

「Hey、俺はまだ満足してねえぞ？」

「なんなら俺様が夜の相手でもしましょうか？」

やれやれ、と振り返って竜の旦那の胸倉を掴んで引き寄せる。

まるでこれから接吻でも交わすくらいの距離。

「やってみろよ？」

はんっ、と鼻で笑われて流石にちよつとムカついてきた。

「腰が立たなくなると思いますけどお？」

「OK、好きにしゃがmr」

竜の旦那がそれ以上何かを言う前に右目の旦那の無言の鉄拳と、

「破廉恥でござらあ!!」の怒声と拳が飛んで来た。

「ちょ、旦那、まじ、くるしっ…!!」

「破廉恥だぞ佐助えええ!!!!」

「首! ねえ首に入ってる!! ちよっとおっ!!」

「政宗さま、何度も何度も言うようですが、ここは甲斐なのですぞ
!」

「だからどうした、俺は好きなように」

「政宗さま!!」

「…s o r r y.
」

（てか、こんだけ分かりやすく反応してんだから気付け猿!!）

（あーもー…ホントにぐっちゃぐちゃになるまで色々してやろうか
と思っちゃったじゃん）

（ああ）

（俺様ってば）

（なんて厄介な相手に惚れたんだろう！）

リクエスト8 (後書き)

どこかすれ違う二人を書きたくて…

失敗しました↑

おおふ、だから伊達ちゃんは苦手だと言ったではr y

リクエストありがとうございました！

リクエスト9 (前書き)

ハリネズミさんからのリクエスト

戦国BASARA

より、

長曾我部×大谷

リクエスト9

ぴ、しょん

鮮血が水たまりを作り、更にその上に落ちるものだから、

しとしと、とそこだけが雨でも降っているかのような気にさせた。

「…ひひ、もう死んだか…早いなア？」

「大谷、手順が違う。」

「うん？さようか…ふむ、ではこれではどうだ。」

ざらりとした刃を背に当てられると、ソレはびくりと大袈裟過ぎる程に身体を震わせた。

叫ぶ事もままならず、ただただ目をいっぱいに見開いて大谷の手元を見つめている。

ぞりっ

表面を削ってやればびくりびくりとのたうち、直にその桃色の皮の

下を晒しながら息絶えた。

「なあ…大谷、こんなことアンタがしなくても良いんだぜ？」

「だが、ぬしがする事でも無いはずだ。」

「そう言われちまうとなあ…」

「我がする事で、なんぞ不都合でもあったか？」

「いや、そういう訳じゃ…」

「ハッキリせぬ男よな。」

呆れたようにふう、と溜息を吐く大谷の手は、やはり赤黒く染まっていた。

自分も毎度その血に塗れていると言うのに、どこか違うようにも思える。

大谷が次の獲物を手にし、またもその身体を無残なものに変えようとしたところで、

俺は手を出して大谷の手を掴む。

「やっぱり俺がやるから、アンタが部屋でゆっくりしててくれよ、な？」

「…チ、そんなに我の手付きがなっていないか？」

「そうじゃなくってよう…元々、同じ西軍とはいえ、

俺らはおめえらの傘下なんだから、こういう仕事は普通しねえだろ？」

「…だが、やはり、ぬしのする仕事でも無かる。」

「それでも、誰かがやんなきゃいけねえ仕事だ…」

「我がしては可愛そうだとも言いたいのか。」

明らかに機嫌を悪くして、大谷は俺の手を振り解こうとする。

だが、そうはさせない。

俺はまだ腕を掴んだまま、コイツの腕から獲物を取り上げた。

「良いんだよ、大谷。アンタは料理なんてしなくって。」

ああ、この厨房に大男一人と興一つは非常にせまっくるしい。

いつも通りに野郎共の分だけでも作って飯炊きの負担を減らそうとしたら、

なぜか大谷が居て、俺の魚を捌き始めた…なんだってんだ一体。

包丁を奪われた大谷は盛大に舌を打って俺を睨む。

「てか、いきなり厨房来たと思ったら『料理を教えよ』って、どういうこった？」

「…三成がな、朝餉も夕餉も取らぬのよ……」

「だからってなんで大谷が…」

「我が作ったものならば食う、と飯炊きに泣きつかれたゆえ。」

おいおい…こんだけ人を心配させて大将ってんだから、おかしい話だぜ。

本当に周りが見えてねえんだなあ、石田の野郎。

がしがしと片手で髪を掻き上げて、一つ溜息を吐く。

「分かった、じゃあちゃんと教えるから、一先ず魚はさつき捌いたので十分だ。」

「…あい。」

教える、という返答に満足したのか、大谷はやや柔らかな口調になったような気がする。

てん、

と置かれたいくつかの小鉢。

中身はと言えば――

長芋とイカの酢の物

ナスとキュウリの浅漬け

たたきごぼう

揚げだし豆腐のきのこあんかけ

さと芋の柚子味噌煮

かぼちゃのそぼろ煮

炭

炭…？

「…こ、れは…」

「卵焼きぞ。」

「あ、おお…」

前途多難。

なるほど、料理が下手なことか。いや、まあ普通はしねえからなあ…

捨てる訳にもいかず、ぱくりとその卵焼き（？）を食べてみた。

「…大谷…」

「なんぞ？」

「…塩、入れただろ…」

結果、吐き出しはしなかったものの、かなり咽せ、しばらく咳が止まらなくなった。

「…もうよい。」

「っ、…あゝ？」

「…我に料理など元より無理な話よ…」

自分でも卵焼きを食べてしまった大谷は割烹着の裾を引きちぎれるくらい強く握りしめて俯いた。

水を飲み、喉を潤しつつ三角巾の上からぐしゃぐしゃと雑に頭を撫でてみる。

目を皿のように見開いた大谷が何か言いたげに顔を上げた。

その口が言葉を発するより早く

「教え甲斐があるってもんだ！今日はこれくらいにして、また明日

な。」

そう言った。

ずれた三角巾が顔にかかり、大谷の表情は伺えなかったが、

ふ、と息の漏れる音に笑っている、と理解した。

それから毎日、誰もが寝静まった頃に、俺と大谷は約束もしてないのに厨房に集まって料理をした。

元々、物覚えも良く、頭の回転も早い大谷は、

教えれば教えただけ吸収して、どんどん腕を上げていった。

試作品を作って、俺が美味しいと言うとそれを石田に持って行く、

そんな日々が続いて、心なしか石田の顔色も良くなった気がする。

「少し魚を焦がしてしまった…」

「っ指が切れた！私の血が掛かった食材は全て捨てよ！食器もだ！」

「三成が夕餉を少しは食うようになった。」

「つッ！…いや、なんでもない。少し指先を炙っただけよ。」

「その魚は食べられるのか？」

「長曾我部、塩の加減が…」

「最近は朝餉も取るようになって来たようよ。」

「見よ長曾我部、改心の出来ぞ。」

「長曾我部、三成が小鉢を完食しよった。」

「今日の浅漬は美味かったらしい。」

「握り飯の具は梅が良いと言うようになったわ。」

「ついに完食よ。ここまで長かった…」

「ぺろりよ、ぺろり。」

毎日の報告も忘れない。

日を追うごとに大谷は俺の前でも普通に笑うようになった。

それは決まって、石田が飯を取った時に限ってだが、まあ、なんて言えば良いのか。

こう、胸の辺りがあつたかくなる。

「そりゃ良かったな。で、明日は何にする？」

「否、明日からはもう三成の飯は作らぬ。」

「…へ？」

素っ頓狂な声を上げる俺とは対照的に、大谷は淡々と言い放つ。

「朝餉も夕餉も取るようになったようだし、私の仕事もここまでの
いう事よ。」

「そ…うか、そうだよな。うん…」

明日からはもう、一緒に厨房に立つ事も無いんだろうなあ。

それを口にすると、思ったよりもずっと重くて、途中で言葉を飲み
込んだ。

真夜中。

もう誰も居ないであろう厨房に足を運べば、小皿が一つ置いてあった。

誰かが運び忘れたのだろうか。

すい、とそれに目をやれば、皿の上には卵焼きが乗っている。

形の良いそれを口に運べば、ふわりと柔らかな甘みが口いっぱいに広がった。

けれど、

「…んだよ、しょっぺえじゃねえか。」

ずっ、

と、鼻を吸る音がやけに大きく響いた気がした。

「勝手に味付けを変えるでない、莫迦め。」

背後では、卵焼きの作り手が、どこか上ずった声でその存在を主張していた。

(…もう石田の飯は作らないんじゃないのか)

(そのつもりよ)

(なあ)

(うん?)

(…なら、俺のために作ってくれよ)

(…莫迦め)

リクエスト9（後書き）

はい、莫迦でございます。すみません、もう何が何やら分からない出来になりました↑

とりあえずアニキは家事全般できる男だと信じています。だって姫若子だもの。

もうどっちがお嫁さんか分かりませんね、すみません。

リクエストありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9874x/>

ロークァットは二度笑う。

2011年11月29日23時01分発行